

**和歌山県立医科大学人体病理学教室
覚道健一
退官記念業績集**



ご挨拶とご報告

平成 23 年 1 月 吉日



平成 1 年 7 月 齋藤晃治教授が急逝されたため、その後任として、平成 2 年 8 月 私儀、覚道健一(和歌山医大、昭和 48 年卒)が東海大学医学部助教授から和歌山県立医科大学第 2 病理学教室教授として着任し 20 年余が経ちます。この間無事大過なく役目を果たすことができましたことは大変な喜びであり、一重に皆様のご支援のおかげと感謝申し上げます。和歌山県立医科大学病理学第 2 教室(大学院医学研究科人体病理学)に今までに在籍した者で、この 20 年間に教授に昇任したもの 8 名(栗林、東家、松浦、横井、中村美砂、楊、韓、森)、学位取得者は、医学博士 24 名(射手矢、梁瀬、東家、風呂谷、中村美砂、石原、荊、単、甲斐、楊、唐、汪、尾崎、布引、安岡、石井、韓、樋口、武田、左、張、白、李、劉)、医科学修士 3 名(鍵弥、西上、佐藤)。日本病理学会病理専門医試験に合格した者 6 名(中村、小野、明石、尾崎、安岡、中込)、日本臨床細胞学会細胞診専門医試験に合格したもの 8 名(中村、小野、明石、宇都宮、尾崎、安岡、中込、松浦)、臨床検査技師で 2 級病理臨床検査技師認定試験に合格した者 19 名(新井、中村、造酒、西村、南浦、鍵弥、林、寒川、樋口(前川)、大上、清水、藪内、井畑、圓井、高橋、山内、小田井、西上、四宮)、日本臨床細胞学会認定資格細胞検査士試験に合格したもの 12 名(新井、造酒、西村、寒川、鍵弥、樋口(前川)、大上、林、末本(藪内)、圓井、山内、小田井)。また、日本病理学会 学術研究賞(A 演説)1 件(松浦)、症例研究賞(B 演説)2 件(単、横井)を発表し、日本病理学会 学術奨励賞 1 件(中村靖司)、日本臨床細胞学会 技師賞 1 件(布引)、日本臨床細胞学会 学会賞 1 件(覚道)を受賞いたしました。学会発表では、優秀賞、ポスター賞(楊、張、西上、劉、李)、和歌山悪性腫瘍研究会若手研究賞(唐)などが表彰されました。また 1990 年より 2011 年 1 月までに PubMed に収載された英文論文 200 篇以上、そのほかに多数の教科書、総説を発表することができました。業績欄をご覧ください。また多数の学会、研究会、地方会を開催させていただき名誉を得ることができました。これも一重に皆様のご支援のおかげと感謝申し上げます。私覚道の退職にあたり、第 2 病理学教室のこの間の活動を振り返り、人事と研究活動を中心にここに記録しご報告申し上げます。

和歌山県立医科大学第2病理学教室（大学院医学研究科人体病理学）の20年間の歩み（1990-2011年）

覚道着任時（1990年8月）に在籍したのは、栗林恒一講師（後に関西医療大学教授）楠山洋司講師（楠山皮膚科）森川吉博助手（後に第2解剖学准教授）大学院生射手矢巖（第3内科）梁瀬能三（整形外科）研究生風呂谷匡彦（後に名手病院院長）東家一雄（後に関西医療大学教授）山口和哉（日高病院消化器外科）研究補助員御前悦子（2008年定年退職）橋本千嘉子、射手矢真由美（旧姓竹田）らでありました。

射手矢は学位取得後助手として病理学2に在籍（1990 - 1991年）、第3内科に帰任しました。新たに大阪大学病理病態学講師松浦成昭が1990年12月助教授として参加し、腫瘍転移とインテグリンの実験的研究をはじめ、病理学会A演説として発表し、1995年大阪大学医学部保健学科教授に就任しました。1992年熊本大学外科より河野一郎（後に朝日野総合病院院長）が助手として参加し隈病院との共同研究として1995年まで甲状腺癌の研究に従事しました。1992年には研究生として石原靖士（第二内科）山口努（日研化学）宮地条治（兵庫医大第一内科）岩崎新（兵庫医大第3内科）大学院生として中村美砂（山口大学理学部）が新たに参加しました。中村は、分子遺伝学的研究技術を学ぶため3ヶ月間兵庫医科大学遺伝学教室（玉置知子教授）のもとへ、国内留学し、復帰後、分子遺伝学的研究室の整備に役割を果たしました。検査室には新井昇一、小山卓也（第一解剖）稲垣充也（和医大中検）平松視也（旧姓楠部、西岡病院）らが加わり病理業務だけでなく、細胞診断をも開始することができました。教授秘書、事務として巽佳代が、引き続き守屋瑠璃子が、研究助手として田下栄子が協力してくれました。1993年には検査室に中村圭吾（日本医学臨床検査研究所）造酒仁志（日本病理研究所）谷口恵美子（2008年1月より助教）西村千枝子（貝塚市民）らが参加し病理業務だけでなく研究業務をも開始しました。また、森川助手は第2病理を退職し米国留学、後任として、東海大学より宇都宮洋才（後に機能性医薬食品探索講座准教授）が助手として着任しました。1994年名古屋国立病院より横井豊治が講師として着任し、後に助教授に昇任しました。横井は呼吸器病理の専門家として活躍し1995年第41回日本病理学会秋期特別総会においてB演説『胸膜の孤立性線維性腫瘍8例の臨床病理学的検討』を発表しました。1999年4月名古屋大学医学部保健学科教授、その後に愛知医科大学へ異動しました。1995年、河野一郎が助手を退職し外科に帰任し、宇都宮洋才が助手を退職し米国バンダービルト大学へ留学したため、その後任助手として筑波大学病理より中村靖司、大阪市大皮膚科より久智行（和医大平成2年卒、皮膚科）が着任しました。また1996年4月13日わからん会（後の日本病理学会近畿支部学術集会）を担当し、大阪市立労働会館にて開催しました。1996年4月久助手が和歌山県立医科大学皮膚科助手に転出し、中村美砂が大学院を修了し学位を取得したため助手採用となりました。

この間中国山東医科大学との国際共同研究をはじめ（文部省科学研究補助金、国際学術研究、基盤研究B、平和中島財団）、単良（山東大普通外科）と荊雪楓（山東大病理学、後に分子医学助教）を大学院生（1994 - 1998年）として受け入れました。1999年山東大学より周教授以下多数の教員と学生を受け入れ国際交流を活発に行いました。またこの結果、山東医科大（山東大学医学部）より、覚道に、客座（客員）教授（guest professor）の称号が授与されました。秘書は守屋から西川サワコ（後に中谷医科歯科病院）へ代わり、研究生として太田裕元（和歌山市中央保健所）村上真紀（川崎医科大学解剖学）甲斐美咲（皮膚科、開業）八木健一（大正製薬）布引治（大阪がん予防検診センター、後に神戸常磐大学講師）を受け入れ、検査技師として、貴志昭美、南浦美穂子、鍵弥朋子（後和歌山市医師会成人病センター検査室）林寛子、寒川月久美（旧姓岩谷、後に谷口病院）らを受け入れました。この間、平成9年には第2病理教員4名全

員の文部省科学研究費申請が採択され、研究室の整備が格段に進歩しました。覚道、基盤研究C、300万円、副甲状腺のクロナリチン、横井、基盤研究C、300万円、開胸肺生検の研究、中村美砂、奨励研究A、カルシトニンと破骨細胞、190万円、中村靖司、萌芽、210万円、genetrap法を用いた甲状腺癌悪性転化であります。

1998年（平成10年9月）には、和歌山医科大学は紀三井寺キャンパスに移転し、教室の研究設備の更新と遺伝子研究のための体制を整えることができました。翌年、附属病院も移転を完了しました。覚道は1998年より2002年3月まで附属図書館長として、図書館の移転と整備にあたりました。またWakayama Medical Reportの編集長として雑誌発行を担当しました。1998年荊雪楓は分子医学教室助手に転出し、1999年5月単良は米国National Cancer Institute, Chemical Carcinogenesis Sectionへ留学しました。1999年4月宇都宮は講師昇任後、配置換えにより中央研究機器施設に転出し、大学院生として、唐衛華（山東大病理、ロータリー財団奨学生）、尾崎敬（消化器外科）、研究生として佐藤三佐子（豪州王立メルボルン大、後にNIH fellow）、宇都宮智子（旧姓小泉、産婦人科）、検査技師として井畑孝敏、井上貴之、秘書として古家（旧姓藪田）幸子らが加わりました。また紀北分院外科より大学院生楊其峰（山東大学普通外科、文部省奨学生、ロータリー財団奨学生）を乳癌の共同研究のため受け入れ、中国やイタリアとの共同研究を進めました。この間大阪医大泌尿器科助手瀬川直樹が前立腺癌の共同研究のため1年間（1998年）在籍し、後に大阪医大より学位を得ました。1999年9月東海大学第二病理学講師、清水市民病院病理部長森一郎が助教授として着任しました。

2000年には、大学院生として、安岡弘直（和医大平成11年卒）汪筱娟（山東大病理学講師、医学振興会ノーリツ鋼機奨学生、ロータリー財団奨学生）、研究生として石井愛子（旧姓村上、大正製薬）、我藤伸樹（富士食研）、明石高明（東海大平成3年卒）らを受け入れました。研究活動としては、2000年10月に日本病理学会が名古屋にて国際病理アカデミー国際会議を主催し、覚道はスライドセミナー（甲状腺結節性病変）をCarney教授（Mayo Clinic名誉教授）とともに担当しました。またこの準備のため2000年7月より9月まで62日間に渡り米国Mayo Clinic他に文部省補助を得て短期出張しました。また、2000年、2001年と日本病理学会病理専門医部会の主催する専門医試験受験資格に必要な細胞診講習会を和歌山県立医科大学にて開催しました。2001年には県民文化会館にて日本臨床細胞学会教育セミナーを開催しました。

2001年、大学院生安岡は1月より1年間休学し、大阪警察病院病理部（辻本正彦部長）へ臨床研修のため出向しました。また2001年4月、検査技師井畑は新宮市立医療センター病理検査室へ就職し、病理検査室の新設に努力することとなりました。その後、森助教授を中心として、新宮市立医療センターに病理検査室を開設し第2病理学教室の関連病院として病理業務をスタートさせました。2001年4月樋口（旧姓前川）観世子（近畿医療技術専門学校）と紙谷（旧姓大上）知子（天理臨床検査技師学校）の2人が検査技師として加わりました。また明石は、7月より和歌山刑務所法務医務官（後に岐阜赤十字病院病理副部長）として就職し教室を離れました。9月8日和歌山ビッグ愛にて、第27回日本臨床細胞学会近畿連合会学術集会を開催しました。2000年より2002年まで文部科学省科学研究費補助金地域連携推進研究（2）課題番号11794027専門医療地域格差是正の新システム、特に画像伝送術中迅速病理診断ネットワークの確立（代表大島章）を、また、2001年より3年間、厚生科学研究費補助金長寿科学総合研究事業（代表大阪大学森本茂人助教授、現金沢医科大学内科学教授）より、研究費（高齢者疾患の易発症性に対する遺伝的負荷の解明13030201）を受けました。

2002年1月安岡が警察病院より帰任し大学院に復学し、代わって尾崎が大学院を休学し、大阪医科大病理部（辻求助教授）のもとへ、助手として1年間病理研修に出向しました。覚道は、3月より電子顕微鏡（日本顕微鏡学会和文誌）編集委員長に選任され、雑誌編集を平成16年まで担当することとなりました。2月国立大阪病院にて、日本病理学会近畿支部第16回学術集会を主催しました。2002年4月には、研究生佐藤三佐子が、第2病理を離れ第1病理の大学院へ進学し、第2

病理には広島大学理学部卒の武田公一、近畿大学生物理工学部より樋口智紀が入学し、中国人留学生韓博（山東大学病理学、ノーリツ鋼機奨学生）が大学院生として、また左揮（笹川奨学生）が研究生として加わりました。検査室には検査技士藪内優子が加わり鍵弥は和歌山市医師会成人病センター検査室に就職しました。

分院外科桜井武雄教授との共同研究は多くの成果を生み、14年度15年度には科学研究補助金基盤C：乳癌におけるレチノイン酸受容体の研究（覚道健一、340万円、課題番号14570155）と若手研究B:乳癌におけるアンドロゲン受容体の研究（梅村定司、課題番号14770618、180万円）を受けるとなりました。

尾崎敬は、社会人大学院生として、新宮市医療センター病理部長として2003年6月より2004年10月まで勤務しました。2004年10月より、臨床検査医学教員が担当してきた附属病院病理部を、中峯講師（奈良医大助教授転出、後に関西医療大学教授）、小野一雄助手（滋賀県成人病センター、後に和歌山日赤医療センター部長）退職に伴い、その業務を第2病理学教室が中心として引き継ぎ、森助教授が臨床検査医学へ転籍し、中央検査部次長となりました。尾崎は、新宮市立医療センターより帰任後、臨床検査医学助手として、森に協力し、病院病理部の運営に参加しました。2003年11月樋口観世子と紙谷知子は、細胞検査士試験に合格し、紙谷知子は、2004年4月より、桜井乳腺クリニックに採用されました。樋口観世子は、2004年9月より、隈病院検査室に採用されました。2003年林志穂、2004年には、佐藤（旧姓清水）小百合が神戸常盤短期大学より検査室に加わりました。2004年4月秘書藪田が退職し、医学振興会に採用されたため、秘書として中里亜由佳が採用され、同年9月に岡崎敬子に交代しました。2004年3月覚道は、和歌山県立医科大学学生部長として、2006年3月まで、学生教育、教務を担当し学生の国際交流に尽力しました。

布引治は、学位取得後、2005年6月、大阪がん検診予防センターより、大阪医科大学病院病理部検査室に勤務することとなりました（2007年4月神戸常盤大学講師に異動）。検査技士末本（旧姓藪内）優子は、2004年11月細胞検査士資格に合格し、2005年6月より大阪医科大学病院病理部検査室に採用されました。その後結婚退職し、夫君末本（第1病理助手）の留学のため2006年7月ボストンに留学し、帰国後2010年より宇都宮産婦人科に勤務することとなりました。2005年には、検査室に高橋信明、圓井知江が近畿医療技術専門学校より加わりました。山東大学病理学教室より、交流大学院生として、はじめてのdouble PhD studentとして白艶花（ノーリツ鋼機奨学生、ロータリー財団奨学生）が加わりました。上海交通大学より歯科医師研究者 張 秤が大学院生として加わり甲状腺乳頭癌、癌幹細胞の研究に従事しました。

2005年10月26、27日新神戸オリエンタルホテルにて、第9回日本内分泌病理学会を主宰し、宮内昭 隈病院院長による甲状腺外科研究会と共同開催しました。学会事務担当として、2005年4月より、野上沙也佳を採用しました。覚道は、日本病理学会全国区理事（2004年、2005年）に選任され、学術委員、企画委員として学会活動を行いました。平成16年、17年度科学研究費萌芽『乳腺におけるカルシトニン・カルシトニン受容体の役割の研究』320万円を得ました。

安岡弘直は学位取得後、2005年4月に第2病理学教室助手に採用され、2006年4月尾崎と交代し、臨床検査医学所属となりました。中村美砂は、2004年12月講師に昇格し、分子病理学的研究指導に尽力しました。覚道は、2005年4月より2006年3月まで和歌山県立高等看護学院学院長を兼務することとなりました。中村靖司は、2005年4月助教授に昇格し、2005年病理学会学術奨励賞を受賞し、平成17年18年度科学研究費萌芽『広範リンパ節転移乳癌に関わる蛋白のプロテオーム解析と分子標的治療の開発』330万円を得ました。2006年10月森と交代し、臨床検査医学准教授へと転籍しました。和歌山県立医科大学大学院は再編整備され、第2病理学は、大学院医学研究科人体病理学、第1病理学は、分子病理学と名称を変えました。

覚道は、日本臨床細胞学会理事として2006年12月まで、指導医会総務委員、指導医会報編集委員長、情報処理小委員会委員長などの役職を与えられました。また近畿連合会会長に選任され2期に

わたり運営に携わりました。2006年3月イタリアのトリノ市にて12名の病理医による甲状腺の低分化癌のconsensus meetingが開かれ覚道はこれに参加し論文発表を行いました（業績217参照）

2006年3月31日退職者として中村美砂（大阪河崎リハビリテーション大学教授）秘書岡崎敬子、大学院修了者樋口智紀（近畿大学医学部細胞学助教）、韓 博（渡米後、山東大学教授）がありました。2006年大学院博士課程学生として、山東大学病理学教室より二人目のdoublePhD studentとして李亜瓊（ロータリー財団奨学生）が加わり、甲状腺炎の研究に従事しました。

2006年5月若狭朋子が大阪市立大学医学部病院病理部助手より、第2病理学講師として着任しました。研修病院に義務づけられたCPCの開催に尽力し、和歌山県立医科大学附属病院研修医CPCを定着させました。2006年7月に尾崎助手が退職し、NIH木村研究室に留学し、甲状腺再生、器官形成、幹細胞の研究に従事し、その後任として、和歌山県立医科大学平成12年卒業 中込奈美が助手として参加しました。中込は2006年に病理専門医、細胞診断専門医を取得し、また、2007年医学博士学位を兵庫医科大学より取得しました。

2006年11月22, 23日、日本病理学会第52回秋期特別総会を和歌山市ダイワロイネットホテルにて主催し741名の参加を得ました。市民公開講座、学生シンポジウムを開催し、市民77名、学生69名の事前登録参加者がありました。また、細胞学会近畿連合会との共同開催としたナイトセッションには細胞検査士延べ63名の参加がありました。25日には和歌山県立医科大学にて、IAPシンポジウムとスライドセミナーを開催しました。これらの運営には、事務局長として森一郎助教授、事務局秘書として野上沙也佳が中心的役割を果たしました。

鍵弥は和歌山市医師会成人病センター検査室勤務（社会人大学院生）のまま、2005年4月新設された修士課程に社会人大学院生第1期生として入学しました。2007年2月秘書野上紗也佳は退職し、前島ちかが参加しました。中国人留学生楊 其峰は、4月、米国より中国へ帰国し、山東大学乳癌外科学教授に就任しました。2007年2級病理試験に、清水、高橋、圓井が合格し、圓井知江が、細胞検査士試験に合格しました。2007年4月1日大阪城ホールにて、近畿連合会会長として、日本臨床細胞学会共催、日本医学会総会の市民公開講座「あなたの癌はここまで治る」を企画実行し、約300名の参加をえました。2007年4月より修士課程大学院生として西上圭子が参加し、2007年7月より劉志艷（山東大学病理学講師、中国政府国費留学生）が博士課程大学院生として来日しました。

2007年10月覚道は、日本病理学会全国区理事（2008年、2009年）に当選し、教育委員会委員長として学会活動を行いました。教育委員会は2年間の任期中に『病理コア画像、第2版』を完成させ、2009年に病理学会公式ホームページ上に公開し、好評を得ました。また内分分泌病理学会理事としてUSCAPのcompanion meetingであるEndocrine Society Meetingの会長に選任され、2010年3月Washington DCでコンパニオンミーティングを主催しました。

2007年12月若狭朋子講師は、大阪赤十字病院病理部へ副部長として転出し 2008年1月尾崎敬が、米国NIH木村研究室より帰国し、助教に復職しました。また谷口恵美子を助教に採用しました。2008年3月技術補助員御崎の退職の後任として、4月より県非常勤職として修士課程学生西上圭子を採用しました。4月圓井知江は退職し、兵庫県明石市の大久保病院検査室に就職しました。新たに、近畿医療技術専門学校より小田井学、神戸常盤短大より山内直樹、天理よろず相談所病院検査学校より四宮千恵が研修生として検査室に加わり、佐藤小百合は、大学院修士課程に入学しました。9月より秘書中峯早苗が加わり、西上圭子とともに細胞学会学術集会担当事務となりました。教室事務引き継ぎを終え11月前島が退職し、12月高橋が退職（協同病理へ就職）しました。12月、細胞検査士試験に修士学生佐藤が合格しました。白艶花は、2009年5月、山東大学より第2の学位を受け、中国へ帰国し、北京大学関連病院（北京腫瘍医院）に就職しました。覚道は2009年9月日本病理学会22、23年度全国区理事に選任され、編集委員会委員長に選任されました。横井豊治が名古屋大学医学部保健学科教授から、2009年7月愛知医科大学病院病理部教授・部長に転出しました。

2010年李亜瓊は、学位を得、4月より学内助教として採用されました。第2病理では学生教育係を担当しました。山東大学での第2の学位を得、中国で就職するため2011年5月帰国予定。2010年12月7日、劉志艷は、和歌山医大第2病理学と小池病院の共同研究によりWDT-UMPの解析を行い、学位を取得しました。山東大学より第2の学位を得るため3月帰国の予定であります。2009年12月細胞検査士試験に合格した山内直樹は2010年1月大阪鉄道病院病理部へ就職し、小田井学は3月淀川キリスト教病院病理部へ、西上圭子は、2010年12月兵庫医科大学病院病理部へ就職しました。四宮千恵は、2011年1月ファルコ岡山ラボへ就職しました。

2010年11月21日、22日神戸ポートピアホテル、神戸国際展示場3号館を開催場所として第49回日本臨床細胞学会秋期大会を開催しました。有料参加者3595名、招待演者、学生、運営スタッフ約300名を加え、総参加者3800名以上と多くの参加者を得ました。近畿連合会各県支部より約250名がスタッフとして協力しました。覚道は、会長講演『甲状腺腫瘍組織分類と甲状腺細胞診の問題点』を発表し、森はシンポジウム『デジタル化時代の細胞診断学』、尾崎はシンポジウム『最も身近な癌：甲状腺癌の発生メカニズムの最前線』、樋口観世子は論文賞受賞講演を担当しました。教室に所属した留学生より、韓、楊、唐、汪、白が参加し、国際フォーラムの発表、座長などを担当しました。汪は総懇親会で歌唱も行いました。その記録写真集が、本冊子の前半部分であります。同日総務委員会があり、覚道は診断学推進協会の専門医会会長に選出されました。

覚道は、2010年12月18日山東大学附属病院120周年記念式典に病院長岡村教授とともに招待され、ともに教育講演を行いました。

2011年3月17日退職記念講演にて、上記の20年間を振り返り、和歌山県立医科大学での当初の抱負と、その到達点を『退職記念講演 覚道健一から皆様へのご報告』として報告する予定であります。

2011年1月記入訂正



加太より望む友が島

業績目録

(2011年1月現在)

英文論文：原著、症例報告

1. Kakudo K, Sugaya T, Onishi S, Miyaji T: Electron microscopic studies of placental and uterine tumors induced in rats. *Acta Pathol Jpn* 26: 703-708, 1976.
2. Kakudo K, Sakurai M, Miyaji T, Ikeda Y, Satani M, Manabe S: Pancreatic carcinoma in infancy -an electron microscopic study. *Acta Pathol Jpn* 26: 719-726, 1976. (被引用数 : 24)
3. Kakudo K: Ultrastructural study of medullary carcinoma of the thyroid. *Med J Osaka Univ* 27: 101-115, 1977.
4. Kakudo K, Miyauchi A, Katayama A: Ultrastructural study of thyroid medullary carcinoma. *Acta Pathol Jpn* 27: 605-621, 1977.
5. Kakudo K, Kitamura H, Miyauchi A, Takai S: Squamous metaplasia of human thyroid gland -An electron microscopic study-. *Med J Osaka Univ* 28: 33-38, 1977.
6. Kakudo K, Sakurai M, Takahashi S, Kitamura H: An electron microscopic study of experimental chronic viral hepatitis in nude mice. *Med J Osaka Univ* 28: 57-66, 1977.
7. Kakudo K: Experimental rat choriocarcinoma -An electron microscopic study-. *Acta Pathol Jpn* 27: 41-50, 1977.
8. Kakudo K, Miyauchi A, Ogihara T, Takai S, Kitamura H, Kosaki G, Kumahara Y: Medullary carcinoma of the thyroid, Giant cell type. *Arch Pathol Lab Med* 102:445-447, 1978. (被引用数 : 63)
9. Katsuse K, Kakudo K, Sakurai M, Kitamura H: Experimental teratoid tumor after fetectomy mice. *Gann (Cancer Science)* 69: 447-448, 1978.
10. Kakudo K, Miyauchi A, Takai S, Katayama S, Kuma K, Kitamura H: C-cell carcinoma of the thyroid -papillary type-. *Acta Pathol Jpn* 29: 653-659, 1979. (被引用数 : 40)
11. Iida Y, Nose O, Kai H, Okada A, Mori T, P Lee, Kakudo K, Yanaihara N: Watery diarrhea with a vasoactive intestinal peptide -producing ganglioneuroblastoma. *Arch Dis Child* 55: 929-936, 1980.
12. Ha K, Ikeda T, Okada S, Inui K, Tagawa T, Takada K, Uchimura N, Kakudo K, Okada A, Yabuuchi H: Hypoglycemia in a child with hepatoblastoma. *Med Ped Oncol* 8: 335-341, 1980.
13. Kakudo K, W.K.Paull Jr, Vacca LL: Immunocytochemical study of substance P containing nerve terminals in rat spinal cord. Technical considerations. *Histochemistry* 71: 17-32, 1981.
14. Miyauchi A, Kakudo K, Fujimoto T, Onishi T, Takai S: Parathyroid cyst; Analysis of the cyst fluid and ultrastructural observations. *Arch Pathol Lab Med* 105: 497-499, 1981.
15. Kakudo K, Miyauchi A, Ogihara T, Takai S, Kitamura H, Kumahara Y, Kawaoi A: Medullary carcinoma of the thyroid with ectopic ACTH syndrome. *Acta Pathol Jpn* 32: 793-800, 1982.
16. Kakudo K, Spurlock BO, Miyauchi A, Kuma K, Shimaoka K, Matsuzuka F: Unusual cytoplasmic inclusion bodies in medullary carcinoma of the thyroid gland. *Acta Pathol Jpn* 32: 319-326, 1982.
17. Yasuda H, Kim C, Kakudo K, Morino H, Kitamura H, Hirano Y, Shigeta Y: Light and electron microscopic changes of the exocrine pancreas in diabetic dogs induced by

- streptozotocin. *Acta Pathol Jpn* 32: 783-792, 1982.
18. Kanokogi M, Uematsu K, Kakudo K, Shimada K, Ikoma F: Mesonephric adenocarcinoma of the urinary bladder; An autopsy case. *J Surg Oncol* 22: 118-120, 1983.
 19. Kakudo K, Vacca LL: Immunohistochemical study of substance P -like immunoreactivity in human thyroid and medullary carcinoma of the thyroid. *J Submicro Cytol* 15:563-568, 1983.
 20. Kakudo K, Kanokogi M, Mitsunobu M, Sawada K, Uematsu K, Noguchi T, Fujita S: Acute mycotic thyroiditis. *Acta Pathol Jpn* 33: 147-151, 1983.
 21. Kakudo K, Uematsu K, Matsuno M, Mitsunobu M, Toyosaka T, Okamoto E, Fukuchi M : Malignant pheochromocytoma with ACTH production., *Acta Pathol Jpn*, 34 : 1405-1412, 1984.
 22. Kakudo K, Uematsu K, Sakurai K, Suehiro M, Fukuchi M : Somatostatin-like immunoreactivity in rat thyroid. Age-associated S cell hyperplasia. *Cell Tiss Res*, 238: 661-663, 1984.
 23. Hishikawa Y, Miura T, Kakudo K, Matsushita H : Neurofibroma of the esophagus., *Rad Med*, 2 : 224-225, 1984.
 24. Kakudo K, Uematsu K, Suehiro M, Fukuchi M : Primary C cell hyperplasia of the thyroid in Fischer 344 rats. An immunohistochemical study, *Acta Pathol Jpn*, 34: 947-955, 1984.
 25. Kakudo K, Itatani H, Uematsu K : Non-papillary carcinoma in situ of the urinary bladder. - An electron microscopic study., *Acta Pathol Jpn*, 34 : 335-344, 1984.
 26. Yokota M, Tani E, Maeda Y, Morimura T, Kakudo K, Uematsu K : Acromegaly associated with suprasellar and pulmonary hemangiopericytomas, case report., *J Neurosurg*, 62: 767-771, 1985.
 27. Kakudo K, Carney J A., Sizemore G W : Medullary carcinoma of the thyroid. Biologic behavior of the sporadic and familial neoplasms., *Cancer*, 55 : 2818-2821, 1985.(被引用数 : 47)
 28. Demirezen S, Kakudo K, Kawashima T, Katsuoka Y, Osamura R Y : Immunocytochemical detection of chlamydia trachomatis on cytological specimens., *Tokai J Exp Clin Med*, 11: 229-234, 1986.
 29. Nakamura A, Kakudo K, Watanabe K : Establishment of a new human thyroid medullary carcinoma cell line.-morphological study. *Virch Arch B Cell Pathol*, 53: 332-335, 1987.
 30. Kakudo K, Miyauchi A, Katayama S, Watanabe K : Ultrastructural study of poorly differentiated medullary carcinoma of the thyroid., *Virch Arch A Pathol Anat*, 410: 455-460, 1987.
 31. Suesada Y, Nakao N, Miura K, Takayasu Y, Miura T, Taguchi K, Ikoma F, Kakudo K : Pseudolymphoma of the retroperitoneum., *Eur J Rad*, 7 : 144-146, 1987.
 32. Aoyagi T, Kakudo K, Satoh S, Hata J, Shiramizu S, Tamaoki N : Multilocular cystic nephroma in an adult: Immunohistochemical study. *J Urol*, 138: 397-399, 1987.
 33. Nakamura A, Kakudo K, Watanabe K, Satoh R, Shimaoka K : Morphological changes of human thyroid medullary carcinoma cell line treated with calcium channel antagonist, Nifedipine., *Kitasato Arch Exp Med*, 61 : 195-200, 1988.
 34. Kakudo K, Hasegawa H, Komatsu N, Nakamura A, Itoh Y, Watanabe K : Immuno-electron microscopic study of calcitonin gene-related peptide (CGRP) in axis cylinders of the vagus nerves. CGRP is present in both myelinated and unmyelinated fibers. *Brain Res*, 440: 153-158, 1988.

35. Norihisa Y, Kakudo K, Tsutsumi Y, Makuuchi H, Sugihara T, Mitomi T : Paget's extension of esophageal carcinoma. Immunohistochemical and mucin histochemical evidence of Paget's cells in the esophageal mucosa. *Acta Pathol Jpn*, 38 : 651-658, 1988.
36. Kakudo K, Mori I, Tamaoki N, Watanabe K : Carcinoma of possible of thymic origin presenting as a thyroid mass. A new subgroup of squamous cell carcinoma of the thyroid. *J Surg Oncol*, 37: 187-192, 1988. (被引用数 : 29)
37. Metoki R, Kakudo K, Tsuji Y, Teng N, Clausen H, Hakomori S : Deletion of histo-blood group A and B antigens, and expression of incompatible A antigen in ovarian cancer. *J Natl Cancer Inst*, 81 : 1151-1157, 1989. (被引用数 : 20)
38. Kakudo K, Itoh Y, Osamura R.Y, Watanabe K : Electron-immunocytochemical localization of calcitonin and calcitonin gene-related peptide(CGRP)in normal human C cells of the thyroid. *Acta Anat*, 135 : 17-21, 1989.
39. Kakudo K, Itoh J, Watanabe K : Effects of synthetic salmon calcitonin on C cells of the thyroid., *Acta Pathol Jpn*, 39 : 545-550, 1989.
40. Lertprasertsuke N, Kakudo K, Nakamura A, Tada N, Osamura Y, Watanabe K, Kubota M : C cell carcinoma of the thyroid: Follicular variant. *Acta Pathol Jpn*, 39 : 393-399, 1989.
41. Onoda N, Tsutsumi Y, Kakudo K, Ozawa A, Niizuma K, Ohkido M, Osamura R Y : Pigmented dermatofibrosarcoma protuberance(Bednar tumor). An autopsy case with systemic metastasis. *Acta Pathol Jpn*, 40(12) : 935-940, 1990.
42. Takami T, Shikata J, Kakudo K, Ito K : Calcitonin gene-related peptide in patients with endocrine tumors., *J Surg Oncol*, 43 : 28-32, 1990. (被引用数 : 23)
43. Lertprasertsuke N, Kakudo K, Osamura Y, Nomoto Y, Sakai H , Watanabe K : Functional interpretation of the kidney Juxta-glomerular apparatus using renin immunohistochemistry in Batter's, pseud-Batter's and Conn's syndromes. *Tokai J Exp Clin Med*, 15 : 317-326, 1990.
44. Katoh Y, Shimamura K, Kakudo K, Osamura R Y, Tamaoki K : An autopsy case of a cystic variant of thymic carcinoma mimicking a thymic cyst., *Virch Arch A Path Anat*, 417: 85-87, 1990.
45. Lertprasertsuke N, Yazaki K, Kakudo K, Tada N, Osamura Y.R : Rectal carcinoid tumor metastatizing to the thyroid and pancreas; An autopsy case exploiting by immunohistochemistry for differentiation tumor involving multiple endocrine organs. *Acta Pathol Jpn*, 40: 352-360, 1990.
46. Ito K, Kakudo K, Mori I, Horiuchi M, Osamura Y.R. : Neuroendocrine differentiation in a case of acinic cell carcinoma of the parotid gland. *Acta Pathol Jpn*, 40 : 279-287, 1990.
47. Tauchi K, Kakudo K, Machimura T, Makuuchi H, Mitomi T : Superficial esophageal carcinoma with special reference to basaloid features. *Pathol Res Pract*, 186: 450-454, 1990.
48. Morikawa Y, Kuribayashi K, Yoshikawa F, Fujita K, Mizushima A, Kakudo K : The role of antibodies in the regulation of delayed-type hypersensitivity. *Immunology*, 74: 146-152, 1991.
49. Kakudo K, Takami K, Katayama S, Matsuura N, Kamosida S, Miyauchi A, Watanabe K : Carcinoembryonic antigen and nonspecific cross-reacting antigen in medullary carcinoma of the thyroid. *Acta Pathol Jpn*, 40 : 261-266, 1991.
50. Tauchi K, Kakudo K, Machimura T, Makuuchi H, Mitomi T : Immunohistochemical studies of blood group-related antigens in human superficial esophageal carcinomas. *Cancer*, 67: 3042-3050, 1991.
51. Morikawa Y, Tohya K, Matsuura N, Matsumoto K, Kakudo K : Small cell carcinoma of the stomach: An immunohistochemical and electron microscopic study. *Histol Histopathol*, 7:

- 629-634, 1992.
52. Morikawa Y, Furotani M, Kakudo K : The role of antigen-presenting cells in the regulation of delayed-type hypersensitivity. Spleen dendritic cells. *Immunology*, 77:81-87, 1992. (被引用数 : 28)
 53. Tohya K, Kimura M, Kakudo K, Kawamata J : Immunohistochemical studies on the distribution of lymphocytes in the peripheral and mucosal lymphoid tissues of laboratory Musk Shrews (*Suncus murinus*). *Developl Comp Immunol*, 16 : 473-483, 1992.
 54. Watanabe K, Takekoshi S, Kakudo K : Effects of Ipriflavone on calcitonin synthesis in C cells of the rat thyroid. *Calcif Tiss Int*, 51(S1) : S27-29, 1992.
 55. Morikawa Y, Furotani M, Matsuura N, Kakudo K : The role of antigen-presenting cells in the regulation of delayed-type hypersensitivity epidermal Langerhans cells and peritoneal exudate macrophages. *Cell Immunol*, 152 : 200-210, 1993. (被引用数 : 27)
 56. Morikawa Y, Matsuura N, Kakudo K, Higuchi R, Koike M, Kobayashi Y : Peason's marrow/pancreas syndrome: a histological and genetic study. *Virch Arch A Pathol Anat*, 432 : 227-231, 1993. (被引用数 : 21)
 57. Morikawa Y, Ishihara Y, Yanase Y, Takao T, Matsuura N, Kakudo K : Malignant mesothelioma of tunica vaginalis with squamous differentiation. *J Urol Pathol*, 2 : 95-102, 1994.
 58. Shan L, Ishihara Y, Nakamura K, Jing X, Kawano I, Koujimoto Y, Kakudo K : Signet ring cell carcinoma with varied malignant components in the urinary bladder-A case report with immunohistochemical study-. *Wakayama Med Rep*, 36: 45-49, 1995.
 59. Iwasaki A, Shan L, Kawano I, Nakamura M, Utsunomiya H, Kobayashi A, Kuma K, Kakudo K : Quantitative analysis of stromal fat content of human parathyroid glands associated with thyroid disease using computer image analysis. *Pathol Int*, 45 : 483-486, 1995.
 60. Shan L, Iwasaki A, Utsunomiya H, Kawano I, Matsuura N, Kobayashi A, Kuma K, Kakudo K : Immunoreactive characteristics and classification of hyperparathyroidism. *Endocrine Pathol*, 6: 145-152, 1995.
 61. Nakamura M, Hashimoto T, Nakajima T, Ichii S, Fukuyama J, Ichihara Y, Kakudo K : A new type of human calcitonin receptor isoform generated by alternative splicing. *Biochem Biophys Res Comm*, 209(2) : 744-751, 1995. (被引用数 : 25)
 62. Nakamura M, Hashimoto T, Furuyama J, Kakudo K : Multiple alternative splice isoforms of parathyroid hormone-related peptide mRNA in human cell lines. *J Mol Endocrinol*, 15:245-249, 1995.
 63. Utsunomiya H, Shan L, Kawano I, Iwasaki A, Ono K, Kobayashi A, Kuma K, Kishikawa S, Kakudo K : Immunolocalization of parathyroid hormone in human parathyroid gland with special references to microwave antigen retrieval. *Endocrin Pathol*, 6 : 223-227, 1995.
 64. Morikawa Y, Ishihara Y, Matsuura N, Miyamoto H, Kakudo K: Malignant Schwannoma of the liver. Case report. *Dig Dis Sci* 40:1279-1282, 1995.
 65. Morikawa Y, Tohya K, Ishida H, Matsuura N, Kakudo K : Different migration patterns of antigen-presenting cells correlate with Th1/Th2-type responses in mice. *Immunology*, 85 : 575-581, 1995. (被引用数 : 30)
 66. Morikawa Y, Ishihara Y, Kawano I, Matsuura N, Kaname A, Kakudo K : Cystic squamous cell carcinoma of the thyroid: A possible new subgroup of intrathyroidal epithelial thymoma. *Endocrine Pathol*, 6(1) : 77-81, 1995.

67. Matsubayashi S, Kawai K, Matsumoto Y, Mukuta T, Morita T, Hirai K, Matsuzuka F, Kakudo K, Kuma K, Tamai H : The correlation between papillary thyroid carcinoma and lymphocytic infiltration in the thyroid gland. *J Clin Endocrinol Metab*, 80 : 3421-3424, 1995.
68. Hisa T, Goto Y, Taniguchi S, Nakanishi T, Kakudo K, Takigawa M : Signs, Syndromes and Diagnoses Post-bullous milia. *Australian J Dermatol*, 37 : 153-154, 1996.
69. Zhang Z, Nakamura M, Taniguchi E, Shan L, Yokoi T, Kakudo K : Late occurrence of K-ras gene mutations in the pathogenesis of squamous cell carcinoma of the lung: Analysis in sputum. *Analyt Quant Cytol Histol*, 18(6) : 501-502, 1996.
70. Hisa T, Taniguchi S, Nishimura T, Nakanishi T, Wakasa K, Kakudo K, Hirachi Y, Takigawa M : Mobile fat; three stage? *Australian J Dermatol*, 37 : 223-224, 1996.
71. Yamaue H, Tanimura H, Isimoto K, Morikawa Y, Kakudo K : Nodular lymphoid hyperplasia of the terminal ileum. Report of a case and the finding of an immunological analysis. *Jap J Surg*, 26:431-434, 1996.
72. Matsuura N, Puzon M W, Irie A, Morikawa Y, Kakudo K, Takada Y : Induction of experimental bone metastasis in mice by transfection of Integrin $\alpha 4$ into tumor cells. *Am J Pathol*, 148: 55-61, 1996. (被引用数 : 78)
73. Hisa T, Taniguchi S, Kakudo K, Ichihashi M, Takashima T, Kato Y, Hayakawa R, Takigawa M : Establishment of an in vitro cell derived from human angiosarcoma. *Bull Cancer*, 83: 589-591, 1996.
74. Morikawa Y, Ishihara Y, Tohya K, Kakudo K, Kurokawa-Seo M, Matsuura N : Expression of fibroblast growth factor receptor-1 in human normal tissues and tumors determined by a new monoclonal antibody. *Arch Pathol Lab Med*, 120 : 490-496, 1996.
75. Hisa T, Taniguchi S, Goto Y, Teramae H, Osato K, Kakudo K, Takigawa M : Scrotal angiokeratoma in a young man. *Acta Derm Venereol (Stockh)*, 76 : 75-75, 1996.
76. Jing X, Nakamura Y, Nakamura M, Yokoi T, Shan L, Katayama N, Ota K, Tsuda T, Okamoto Y, Kakudo K : Massive kidney involvement of adult T-cell leukemia/lymphoma coincident with schistosomiasis japonica. *Wakayama Med Rep*, 37: 27-33, 1996.
77. Jing X, Nakamura Y, Nakamura M, Yokoi T, Shan L, Taniguchi E, Kakudo K : Detection of Epstein-Barr Virus DNA in gastric carcinoma with lymphoid stroma. *Viral Immunol*, 10:49-58, 1997.
78. Sato H, Inoue D, Koshiyama H, Takahashi H, Kakudo K : Interest of routine measurement of serum calcitonin: study of thyroidectomized patients. *J Clin Endocrinol Metab*, 82:2755-2755, 1997.
79. Nakamura M, Zhang Z, Shan L, Hisa T, Sasaki M, Tsukino R, Yokoi T, Kaname A, Kakudo K : Allelic variants of human calcitonin receptor in the Japanese population. *Hum Genet*, 99:38-41, 1997. (被引用数 : 33)
80. Yamauchi M, Inoue D, Fukunaga Y, Kakudo K, Koshiyama H : A case of sarcoid reaction associated with papillary thyroid carcinoma. *Thyroid*, 7: 901-903, 1997.
81. Zhang Z, Nakamura M, Taniguchi E, Shan L, Yokoi T, Kakudo K : A simple approach to single-cell microdissection and molecular analysis. *Analyt Quant Cytol Histol*, 19(6): 514-518, 1997.
82. Shan L, Nakamura Y, Nakamura M, Zhang Z, Jing X, Hara T, Yokoi T, Kakudo K : Synchronous and metachronous multicentric squamous cell carcinomas in the upper aerodigestive tract. *Pathol Int*, 47: 68-72, 1997.
83. Shan L, Kakudo K, Nakamura M, Nakamura Y, Yokoi T, Ishimoto J, Kawahara K, Takami

- H : Clonality of the parathyroid nodules with uremic parathyroid hyperplasia. *Pathol Oncol Res*, 3: 198-203, 1997.
84. Shan L, Nakamura M, Nakamura Y, Inoue D, Morimoto S, Yokoi T, Kakudo K : Comparative analysis of clonality and pathology in primary and secondary hyperparathyroidism. *Virchow Arch*, 430 : 247-251, 1997. (被引用数 42)
85. Osamura R. Y, Yasuda O, Kawakami T, Itoh Y, Inada K, Kakudo K : Immunoelectron microscopic demonstration of regulated pathway for calcitonin and constitutive pathway for carcinoembryonic antigen in the same cells of human medullary carcinomas of thyroid glands. *Mod Pathol*, 10(1) : 7-11, 1997.
86. Yokoi T, Tomita Y, Fukuya M, Ichihara S, Kakudo K, Takahashi Y : Pulmonary hypertension associated with systemic lupus erythematosus. *Arch Pathol Lab Med*, 122: 467-470, 1998. (被引用数 : 71)
87. Matsuzuka F, Fukata S, Kuma K, Miyauchi A, Kakudo K : Gene rearrangement of immunoglobulin as a marker of thyroid lymphoma., *World J Surg*, 22 : 558-561, 1998.
88. Jing X, Yokoi T, Nakamura Y, Nakamura M, Shan L, Tomimoto S, Hano T, Kakudo K : Pulmonary capillary hemangiomas. A unique feature of congestive vasculopathy associated with hypertrophic cardiomyopathy. *Arch Pathol Lab Med*, 122: 94-96, 1998.
89. Nakamura Y, Shan L, Kakudo K : Histological characteristics of thyroid carcinoma in Japan. *Thyroidol Clin Exp*, 10: 121-124, 1998.
90. Yokoi T, Suzuki T, Yatabe Y, Suzuki M, Kurumaya H, Koshikawa T, Kuhara H, Kuroda M, Nakamura N, Nakatani Y, Kakudo K : Solitary fibrous tumor: significance of p53 and CD34 immunoreactivity in its malignant transformation. *Histopathology*, 32: 423-432, 1998.
91. Shan L, Nakamura M, Nakamura Y, Utsunomiya H, Shou N, Jiang X, Yokoi T, Kakudo K : Somatic mutation in RET protooncogene in Japanese and Chinese sporadic medullary thyroid carcinoma. *Jpn J Cancer Res (Cancer Science)*, 89: 883-886, 1998.
92. Kakudo K, Shan L, Nakamura Y, Inoue D, Koshiyama H, Sato H : Clonal analysis helps differentiate aberrant thyroid tissue from thyroid carcinoma. *Human Pathol*, 29: 187-190, 1998.
93. Jing X, Kakudo K, Murakami M, Nakamura Y, Nakamura M, Yokoi T, Oura S, Sakurai T : Extensive intraductal component(EIC) and estrogen receptor(ER) status in breast cancer. *Pathol Int*, 48: 440-447, 1998.
94. Jing X, Nakamura Y, Nakamura M, Shan L, Yokoi T, Kakudo K, Tsuno H, Koike M : Multiple smooth-muscle neoplasm and thyroid carcinoma in an adult with AIDS. *Acta Oncol*, 37: 205-208, 1998.
95. Shan L, Nakamura Y, Zhang Z, Jing X, Nakamura M, Murakami M, Yokoi T, Kakudo K : Overexpression of p53 protein correlates with a high risk of malignant transformation of adenomas in patients with multiple colorectal adenomas. *Pathol Int*, 48: 281-286, 1998.
96. Sakamoto Y, Taniguchi E, Kakudo K : Objective evaluation of Papanicolaou staining. *Analyt Quant Cytol Histol*, 20: 250-256, 1998.
97. Shan L, Nakamura Y, Nakamura M, Yokoi T, Tsujimoto M, Arima R, Kameya T, Kakudo K : Somatic mutations of MEN 1 gene in the sporadic endocrine tumors., *Lab Invest*, 78 : 471-475, 1998. (被引用数 : 47)
98. Jing X, Kakudo K, Murakami M, Nakamura Y, Nakamura M, Yokoi T, Yang Q, Oura S, Sakurai T : Intraductal spread of invasive breast carcinoma has positive correlation with c-erbB-2 overexpression and vascular invasion. *Cancer* 86:439-448, 1999.

99. Shan L, Nakamura Y, Murakami M, Nakamura M, Naito A, Kawahara K, Utsunomiya H, Yokoi T, Kakudo K: Clonal emergence in uremic parathyroid hyperplasia is not related to MEN1 gene abnormality. *Jap J Cancer Res* 90: 965-969, 1999.
100. Kishikawa S, Shan L, Ogihara K, Utsunomiya H, Nakamura M, Nakamura Y, Naito A, Kakudo K: Overexpression and genetic abnormality of p53 in parathyroid adenoma. *Pathol Int*, 49: 853-857, 1999.
101. Nakamura M, Jing X, Zhang Z, Yasuoka H, Nakamura Y, Yokoi T, Ohura S, Sakurai T, Kakudo K: Genetic variants of calcitonin receptor and breast cancer in Japanese. *The Breast* 8:104-106, 1999.
102. Yang Q, Sakurai T, Jing X, Yoshimura G, Umemura T, Kakudo K: Expression of Bcl-2, but not Bax, correlates with estrogen receptor status and tumor proliferation in invasive breast carcinoma. *Pathol Int*, 49: 775-980, 1999. (被引用数: 31)
103. Yamauchi M, Inoue D, Sato H, Ashida C, Hiraumi H, Shan L, Kakudo K, Koshiyama H: A case of ectopic thyroid in lateral neck associated with Graves disease. *Endocrine J*, 46: 731-734, 1999.
104. Katoh R, Kakudo K, Kawaoi A: Accumulated basement membrane material in hyalinizing trabecular tumors of the thyroid. *Mod Pathol*, 12: 1057-1061, 1999.
105. Kai M, Nunobiki O, Taniguchi E, Sakamoto Y, Kakudo K: Quantitative and qualitative analysis of stain color using RGB computer color. *Analyt & Quant Cytol & Histol* 21(6):477-480, 1999.
106. Yang Q, Shan L, Yoshimura G, Taniguchi E, Suzuma T, Nakamura Y, Nakamura M, Utsunomiya H, Tang W, Sakurai T, Kakudo K: Thymidine Phosphorylase expression in invasive carcinoma: correlations with clinicopathologic variables and in vitro chemosensitivity to 5-Fluorouracil. *Anticancer Res*, 19: 5543-5546, 1999.
107. Higuchi R, Minami T, Shimoyamada Y, Kamisako H, Koike M, Takigawa H, Kakudo K: Diaphragmatic hernia in an infant of diabetic mother: an unusual association in diabetic embryopathy. *Pediatr Int* 41(5): 581-583, 1999.
108. Tang W, Wang X, Utsunomiya H, Nakamura Y, Yang Q, Zhang Q, Zhou G, Tsubota Y, Mabuchi Y, Li L, Kakudo K: Thymidine phosphorylase expression in tumor stroma of uterine cervical carcinomas: histological features and microvessel density. *Cancer letters*, 148: 153-159, 2000.
109. Naganuma H, Murayama H, Ohtani N, Takaya K, Mori Y, Sakai N, Kakudo K: Optically clear nuclei in papillary carcinoma of the thyroid: Demonstration of one of the fixation artifacts and its practical usefulness. *Pathol Int*, 50: 113-118, 2000.
110. Yang Q, Sakurai T, Yoshimura G, Shan L, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Kokawa Y, Nakamura Y, Tang W, Utsunomiya H, Mori I, Kakudo K: Expression of Bcl-2 but not Bax or p53 correlates with in vitro resistance to a series of anticancer drugs in breast carcinoma. *Breast Cancer Res and Treat* 61:211-216, 2000. (被引用数32)
111. Katoh R, Kawaoi A, Miyagi E, Li X, Suzuki K, Nakamura Y, Kakudo K: Thyroid transcription factor-1 in normal, hyperplastic, and neoplastic follicular thyroid cells examined by immunohistochemistry and nonradioactive in situ hybridization. *Mod Pathol*, 13(5): 570-576, 2000.
112. Shan L, Yang Q, Nakamura M, Nakamura Y, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Active allele loss of the androgen receptor gene contributes to loss of androgen receptor expression in female breast cancers. *Biochem and Biophys Res Commun* 275:488-492, 2000. (被引用数: 32)

113. Yang Q, Sakurai T, Shan L, Yu Z, Yoshimura G, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Nakamura M, Nakamura Y, Mori I, Kakudo K: Novel polymorphisms of prostate-specific antigen (PSA) gene associated with PSA mRNA expression in breast cancer. *J Hum Genet* 45(6):363-366, 2000.
114. Taniguchi E, Yang Q, Tang W, Nakamura Y, Shan L, Nakamura M, Sato M, Mori I, Sakurai T, Kakudo K : Cytologic grading of invasive breast carcinoma. - Correlation with clinicopathologic variables and predictive value of nodal metastasis-, *Acta Cytol* 44(4):587-591, 2000.
115. Yang Q, Sakurai T, Shan L, Yoshimura G, Yu Z, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Nakamura Y, Nakamura M, Utsunomiya H, Mori I, Kakudo K: Thymidine phosphorylase expression correlates with tumor differentiation and Bcl-2 in invasive breast cancer. *Breast Cancer* 7:210-214, 2000.
116. Katoh R, Miyagi E, Nakamura N, Li X, Suzuki K, Kakudo K, Kobayashi M: Expression of thyroid transcription factor-1 (TTF-1) in human C cells and medullary thyroid carcinomas. *Hum Pathol*, 31(3): 386-393, 2000. (被引用数 : 39)
117. Tamaki H, Sakurai T, Sumimura J, Yang Q, Kakudo K: Breast cancer in Wakayama Prefecture - geographic comparison between urban and rural. *Wakayama Med Rep*, 40: 29-34, 2000.
118. Yang Q, Sakurai T, Yoshimura G, Yano T, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Nakamura Y, Nakamura M, Utsunomiya H, Mori I, Kakudo K: Overexpression of p27 protein in human breast cancer correlates with in vitro resistance to doxorubicin and mitomycin C. *Anticancer Res*, 20:4319-4322, 2000.
119. Yang Q, Mori I, Shan L, Nakamura M, Nakamura Y, Utsunomiya H, Yoshimura G, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Sakurai T, Kakudo K : Biallelic inactivation of retinoic acid receptor 2 gene by epigenetic change in breast cancer. *Am J Pathol*, 158(1):299-303, 2001. (被引用数 : 47)
120. Shan L, Yang Q, Nakamura Y, Nakamura M, Miyauchi A, Tsujimoto M, Nakatani Y, Wakasa K, Mori I, Kakudo K: Frequent loss of heterozygosity at 1p36.3 and p73 abnormality in parathyroid adenomas. *Mod Pathol*, 14:273-278, 2001.
121. Nakamura M, Morimoto S, Zhang Z, Utsunomiya H, Inagami T, Ogihara T, Kakudo K : Calcitonin receptor gene polymorphism in Japanese women: correlation with body mass and bone mineral density. *Calcif Tissue Int*. 68(4):211-218, 2001.
122. Nunobiki O, Sato M, Taniguchi E, Nakamura Y, Mori I, Kakudo K: Morphometric characterization of endometrial glands using quantitative cytology. *Analyt Quant Cytol Histol*, 23: 201-206, 2001.
123. Yang Q, Sakurai T, Mori I, Yoshimura G, Nakamura M, Nakamura Y, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Kakudo K: Prognostic significance of BRCA 1 expression in Japanese sporadic breast carcinoma. *Cancer*, 92:54 - 60, 2001. (被引用数 : 45)
124. Yang Q, Shang L, Segawa N, Nakamura M, Nakamura Y, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Novel polymorphisms in prostatic specific gene and its association with prostate cancer. *Anticancer Res* 21:197-200, 2001.
125. Yang Q, Mori I, Sakurai T, Yoshimura G, Suzuma T, Nakamura Y, Nakamura M, Taniguchi E, Tamaki T, Umemura T, Kakudo K: Correlation between nuclear grade and biological prognostic variables in invasive breast cancer. *Breast Cancer*, 8:105-110, 2001.
126. Yasui A, Oka K, Utsunomiya H, Kakudo K, Suzuki T, Yoshida T, Park HM, Fukazawa K,

- Muramatsu T: Elevated gastrin secretion by in vivo gene electroporation in skeletal muscle. *Int J Molec Med*, 8:489-494, 2001.
127. Taniguchi E, Yang Q, Tang W, Nakamura Y, Nakamura M, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Cytological grading of invasive breast carcinoma. [letter], *Acta Cytol*, 45:658-659, 2001.
128. Yang Q, Sakurai T, Yoshimura G, Mori I, Nakamura M, Nakamura Y, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Kakudo K: Hypermethylation does not account for the frequent loss of the retinoic receptor beta 2 in breast carcinoma. *Anticancer Res*, 21:1829-1833, 2001.
129. Segawa N, Nakamura M, Nakamura Y, Mori I, Katsuoka Y, Kakudo K: Phosphorylation of mitogen-activated protein kinase is inhibited by calcitonin in DU145 prostate cancer cells. *Cancer Res* 61:6060-6063, 2001.
130. Segawa N, Mori I, Utsunomiya H, Nakamura M, Nakamura Y, Shan L, Kakudo K, Katsuoka Y: Prognostic significance of neuroendocrine differentiation, proliferation activity and androgen receptor expression in prostate cancer. *Pathol Int* 52(6):452-459, 2001. (被引用数 : 44)
131. Nakamura M, Yang Q, Gouda T, Takehara A, Ohota H, Miyajima M, Kakudo K: Loss of calcitonin binding in rat is not related to calcitonin receptor gene abnormality. *Biochem Biophys Res Commun*, 284:1184-1188, 2001.
132. Wang X, Mori I, Tang W, Yang Q, Nakamura M, Nakamura Y, Sato M, Sakurai T, Kakudo K: Metaplastic carcinoma of the breast: p53 analysis identified the same point mutation in the three components. *Mod Pathol*, 14(11):1183-1189, 2001.
133. Wang X, Mori I, Tang W, Utsunomiya H, Nakamura M, Nakamura Y, Zhou G, Kakudo K: Gastrointestinal stromal tumors: Clinicopathological study of Chinese cases. *Pathol Int*, 51:701-706, 2001. (被引用数 : 20)
134. Yang Q, Yoshimura G, Sakurai T, Nakamura M, Nakamura Y, Shang L, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Mori I, Kakudo K: Allelic loss of chromosome 3p24 correlates with tumor progression rather than with retinoic acid receptor beta 2 expression in breast carcinoma. *Breast Cancer Res Treat*, 70:39-45, 2001.
135. Yang Q, Yoshimura G, Suzuma T, Tamaki T, Umemura T, Nakamura M, Nakamura Y, Wang X, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Clinicopathological significance of fragile histidine triad transcription protein expression in breast cancer. *Clin Cancer Res*, 7:3869-3872, 2001. (被引用数 : 26)
136. Ito Y, Yoshida H, Nakano K, Kobayashi K, Yokozawa T, Hirai K, Matsuzuka F, Matsuura N, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Caveolin-1 overexpression is an early event in the progression of papillary carcinoma of the thyroid. *Br J Cancer*, 86(12):912-916, 2002. (被引用数 : 31)
137. Ito Y, Yoshida H, Nakano K, Kobayashi K, Yokozawa T, Hirai K, Matsuzuka F, Matsuura N, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Expression of cdc25A and cdc25B proteins in thyroid neoplasms. *Br J Cancer*, 86: 1909-1913, 2002. (被引用数 : 22)
138. Kakudo K, Katoh R, Sakamoto A, Asa S, DeLellis RA, Carney JA, Naganuma H, Kameyama K, Takami H: Thyroid gland: international case conference. *Endocr Pathol*, 13(2): 131-134, 2002.
139. Kameyama K, DeLellis RA, Lloyd RV, Kakudo K, Takami HE: Parathyroid carcinomas: can clinical outcomes for parathyroid carcinomas be determined by histologic evaluation alone? *Endocr Pathol*, 13(2): 135-139, 2002.
140. Nakamura M, Yang Q, Ozaki T, Nakamura Y, Yamasaki H, Mori I, Kakudo K: Induction

- of uPA but not NF-IL3A by calcitonin is dependent on Erk1/2 phosphorylation in porcine renal cell line LLC-PK1. *Biochem Biophys Res Com*, 290: 1483-1488, 2002.
141. Sato M, Nakamura Y, Sogawa T, Yang Q, Taniguchi T, Taniguchi E, Kagiya T, Nakamura M, Mori I, Kakudo K: Immunolocalization of glucose transporter 1 and 3 in the placenta: Application to cytodiagnosis of Papanicolaou smear. *Diagn Cytopathol*, 26: 373-379, 2002.
142. Tang W, Nakamura Y, Tsujimoto M, Sato M, Wang X, Kurozumi K, Nakahara M, Nakao K, Nakamura M, Mori I, Kakudo K: Heparanase: a key enzyme in invasion and metastasis of gastric carcinoma. *Mod Pathol*, 15: 593-598, 2002. (被引用数 : 53)
143. Tang W, Taniguchi E, Wang X, Mori I, Kagiya T, Yang Q, Nakamura Y, Nakamura M, Yoshimura G, Sakurai T, Kakudo K: Loss of cell cohesion in breast cytology as a characteristic of neuroendocrine carcinoma. *Acta Cytol*, 46: 835-840, 2002.
144. Utsunomiya H, Ueshima H, Kawashiro M, Yang Q, Nakamura M, Nakamura Y, Sakurai T, Mori I, Kakudo K: Thymidine phosphorylase is regulated by tamoxifen in T47D breast cancer cell line. *Breast Cancer*, 9: 107-110, 2002.
145. Wang X, Mori I, Tang W, Nakamura M, Nakamura Y, Sato M, Sakurai T, Kakudo K: p63 Expression in Normal, Hyperplastic and Malignant Breast Tissues. *Breast Cancer* 9(3):216-219, 2002.
146. Wang X, Mori I, Tang W, Utsunomiya H, Nakamura M, Nakamura Y, Zhou G, Kakudo K: Helpful parameter for malignant potential of gastrointestinal stromal tumors (GIST). *Jpn J Clin Oncol*, 32(9): 347-351, 2002.
147. Yang Q, Barbareschi M, Mori I, Mauri F, Muscara M, Nakamura M, Nakamura Y, Yoshimura G, Sakurai T, Caffo O, Galligioni E, Dalla Palma P, Kakudo K: Prognostic value of thymidine phosphorylase expression in breast carcinoma. *Int J Cancer*, 97(4):512-517, 2002. (被引用数 : 23)
148. Yang Q, Nakamura M, Nakamura Y, Yoshimura G, Suzuma T, Umemura T, Tamaki T, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Correlation of prostate-specific antigen promoter polymorphisms with clinicopathological characteristics in breast cancer. *Anticancer Res*, 22(3): 1825-1828, 2002.
149. Yang Q, Yoshimura G, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Thymidine phosphorylase and breast carcinoma. *Anticancer Res* 22(4): 2355-2360, 2002.
150. Yang Q, Nakamura M, Nakamura Y, Yoshimura G, Suzuma T, Umemura T, Shimizu Y, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Two-hit inactivation of FHIT by loss of heterozygosity and hypermethylation in breast cancer. *Clin Cancer Res*, 8:2890-2893, 2002. (被引用数 : 38)
151. Ito Y, Matsuzuka F, Yoshida H, Morita S, Nakano K, Kobayashi K, Yokozawa T, Hirai K, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Encapsulated anaplastic thyroid carcinoma without invasive phenotype with favorable prognosis: report of a case. *Surg Today*, 33(4):277-281, 2003.
152. Hirokawa M, Carney JA, Goellner JR, DeLellis RA, Heffess CS, Katoh R, Tsujimoto M, Kakudo K: Observer variation of encapsulated follicular lesions of the thyroid gland. *Am J Surg Pathol*, 26:1508-1514, 2002. (被引用数 : 86)
153. Ito Y, Miyoshi E, Uda E, Yoshida H, Uruno T, Takamura Y, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Matsuura N, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: 14-3-3 σ possibly plays a constitutive role in papillary carcinoma, but not in follicular tumor of the thyroid. *Cancer Lett*, 196(1): 87-91, 2003.

154. Ito Y, Miyoshi E, Uda E, Yoshida H, Uruno T, Takamura Y, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Matsuura N, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: 14-3-3 σ possibly plays a constitutive role in papillary carcinoma, but not in follicular tumor of the thyroid. *Cancer Lett*, 200(2): 161-166, 2003.
155. Ito Y, Yoshida H, Matsuzuka F, Matsuura N, Nakamura Y, Nakamine H, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Cdc2 expression in primary thyroid lymphoma: its relationship with biological aggressiveness and G2 cyclins. *Pathol Res Pract*, 199(8): 533-538, 2003.
156. Ito Y, Yoshida H, Matsuzuka F, Matsuura N, Nakamura Y, Nakamine H, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Jun activation domain-binding protein 1 expression in malignant lymphoma of the thyroid: its linkage to degree of malignancy and p27 expression. *Anticancer Res*, 23(5b): 4121-4125, 2003.
157. Ito Y, Yoshida H, Nakano K, Takamura Y, Miya A, Kobayashi K, Yokozawa T, Matsuzuka F, Matsuura N, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Bag-1 expression in thyroid neoplasm: its correlation with Bcl-2 expression and carcinoma dedifferentiation. *Anticancer Res*, 23(1B): 569-576, 2003.
158. Ito Y, Yoshida H, Uruno T, Nakano K, Miya A, Kobayashi K, Yokozawa T, Matsuzuka F, Matsuura N, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Survivin expression is significantly linked to the dedifferentiation of thyroid carcinoma. *Oncol Rep* 10(5): 1337-1340, 2003.
159. Kuma S, Hirokawa M, Miyauchi A, Kakudo K: Oncocytic thyroid carcinoma with extensive myxoid stroma. *Histopathology*, 42(5): 514-516, 2003.
160. Kuma S, Hirokawa M, Miyauchi A, Kakudo K, Katayama S: Cytologic features of hyalinizing trabecular adenoma of the thyroid. *Acta Cytol* 47(3): 399-404, 2003.
161. Mori I, Miyauchi A, Kuma S, Tang W, Kakudo K: Thyroid nodular lesion: analysis of cancer risk based on Kuma Hospital experience. *Pathol Int*, 53(9): 579-583, 2003.
162. Mori I, Nakamura M, Iteya I, Utsunomiya H, Takekoshi S, Watanabe K, Kakudo K: Exogenous Calcitonin Suppresses Growth Fraction of Thyroid C Cells. *Acta Histochemica et Cytochemica*, 36(5): 439-442, 2003.
163. Nakamura Y, Yasuoka H, Tsujimoto M, Yang Q, Imabun S, Nakahara M, Nakao K, Nakamura M, Mori I, Kakudo K: Flt-4-positive vessel density correlates with vascular endothelial growth factor-D expression, nodal status, and prognosis in breast cancer. *Clin Cancer Res*, 9(14): 5313-5317, 2003. (被引用数 : 38)
164. Nakamura Y, Yasuoka H, Tsujimoto M, Yang Q, Imabun S, Nakahara M, Nakao K, Nakamura M, Mori I, Kakudo K: Prognostic significance of vascular endothelial growth factor D in breast carcinoma with long-term follow-up. *Clin Cancer Res*, 9(2): 716-722, 2003. (被引用数 : 62)
165. Nakamura Y, Yasuoka H, Tsujimoto M, Yang Q, Tsukiyama A, Imabun S, Nakahara M, Nakao K, Nakamura M, Mori I, Kakudo K: Clinicopathological significance of vascular endothelial growth factor-C in breast carcinoma with long-term follow-up. *Mod Pathol*, 16(4): 309-314, 2003. (被引用数 : 35)
166. Nunobiki O, Taniguchi E, Ishii A, Tang W, Utsunomiya H, Nakamura Y, Mori I, Kakudo K: Significance of hormone receptor status and tumor vessels in normal, hyperplastic and neoplastic endometrium. *Pathol Int*, 53(12): 846-852, 2003.
167. Ozaki T, Mori I, Nakamura M, Utsunomiya H, Tabuse K, Kakudo K: Microwave cell death: Immunohistochemical and enzyme histochemical evaluation. *Pathol Int*, 53(10): 686-692, 2003.

168. Ozaki T, Tabuse K, Tsuji T, Nakamura Y, Kakudo K, Mori I: Microwave cell death: Enzyme histochemical evaluation for metastatic carcinoma of the liver. *Pathol Int*, 53(12): 837-845, 2003.
169. Pengsaa P, Sriamporn S, Kritpetcharat O, Kamsa-Ard S, Suwanrungruang K, Noda S, Kakudo K: A comparison of cytology with Pap smears taken by a gynecologist and with a self-sampling device. *Asian Pac J Cancer Prev*, 4(2): 99-102, 2003.
170. Tang W, Nakamura Y, Zuo H, Yasuoka H, Yang Q, Wang X, Nakamura M, Mori I, Miyauchi A, Kakudo K: Differentiation, proliferation and retinoid receptor status of papillary carcinoma of the thyroid. *Pathol Int*, 53(4): 204-213, 2003.
171. Wang X, Nakamura M, Mori I, Takeda K, Suzuma T, Yoshimura G, Sakurai T, Kakudo K: Comparison of Gene Expression in Breast Cancer Using Laser Capture Microdissection and Quantitative RT-PCR. *Acta Histochemica et Cytochemica*, 36(5): 421-425, 2003.
172. Yang Q, Sakurai T, Yoshimura G, Suzuma T, Umemura T, Nakamura M, Nakamura Y, Mori I, Kakudo K: Prognostic value of Bcl-2 in invasive breast cancer receiving chemotherapy and endocrine therapy. *Oncology Report*, 10(1): 121-125, 2003. (被引用数 : 24)
173. Han B, Zhou G, Zhang Q, Zhang J, Wang X, Tang W, Kakudo K: Effect of arsenic trioxide (ATO) on human lung carcinoma PG cell line: ATO induced apoptosis of PG cells and decreased expression of Bcl-2, Pgp. *J Exp Ther Oncol*, 4:335-342, 2004.
174. Hirokawa M, Kuma S, Miyauchi A, Qian ZR, Nakasono M, Sato T, Kakudo K: Morules in cribriform-morular variant papillary thyroid carcinoma: Immunohistochemical characteristics and distinction from squamous metaplasia. *APMIS*, 112(4-5):275-282, 2004.
175. Ishii A, Nakamura M, Nakamura A, Kimura M, Kakudo K: Localization of calcitonin receptor mRNA in rat kidney: an in situ hybridization study. *Acta Histochem et Cytochem* 37(4):259-265, 2004.
176. Ito Y, Yoshida H, Matsuzuka F, Matsuura N, Nakamura Y, Nakamine H, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Expression of the components of the Cip/Kip family in malignant lymphoma of the thyroid. *Pathobiology*, 71(3):164-170, 2004.
177. Ito Y, Yoshida H, Matsuzuka F, Matsuura N, Nakamura Y, Nakamine H, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Polo-like kinase 1 (PLK1) expression is associated with cell proliferative activity and cdc2 expression in malignant lymphoma of the thyroid. *Anticancer Res*, 24(1):259-263, 2004.
178. Ito Y, Yoshida H, Matsuzuka F, Matsuura N, Nakamura Y, Nakamine H, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Cdc25A and cdc25B expression in malignant lymphoma of the thyroid: correlation with histological subtypes and cell proliferation. *Int J Mol Med*, 13(3):431-435, 2004.
179. Ito Y, Miyoshi E, Sasaki N, Kakudo K, Yoshida H, Tomoda C, Uruno T, Takamura Y, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Matsuura N, Kuma K, Miyauchi A: Polo-like kinase 1 overexpression is an early event in the progression of papillary carcinoma. *Br J Cancer*, 90(2):414-418, 2004. (被引用数 : 21)
180. Ito Y, Yoshida H, Tomoda C, Uruno T, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: S100A4 expression is an early event of papillary carcinoma of the thyroid. *Oncology*, 67(5-6):397-402, 2004.
181. Kakudo K, Tang W, Ito Y, Nakamura Y, Yasuoka H, Morita S, Miyauchi A: Parathyroid invasion, nodal recurrence, and lung metastasis by papillary carcinoma of the thyroid. *J Clin Pathol*, 57(3):245-249, 2004.

- 182.Kakudo K, Tang W, Ito Y, Mori I, Nakamura Y, Miyauchi A: Papillary carcinoma of the thyroid in Japan: subclassification of common type and identification of low risk group. *J Clin Pathol*, 57(10):1041-1046, 2004. (被引用数 : 20)
- 183.Kuma S, Hirokawa M, Xu B, Miyauchi A, Kakudo K, Sano T: Cribriform-morular variant of papillary thyroid carcinoma. Report of a case showing morules with peculiar nuclear clearing. *Acta Cytol*, 48(3):431-436, 2004.
- 184.Lloyd RV, Erickson LA, Casey MB, Lam KY, Lohse CM, Asa SL, Chan JK, DeLellis RA, Harach HR, Kakudo K, LiVolsi VA, Rosai J, Sebo TJ, Sobrinho-Simoes M, Wenig BM, Lae ME: Observer Variation in the Diagnosis of Follicular Variant of Papillary Thyroid Carcinoma. *Am J Surg Pathol*, 28(10):1336-1340, 2004. (被引用数 14)
- 185.Sato M, Taniguchi E, Kagiya T, Nunobiki O, Yang Q, Nakamura M, Nakamura Y, Mori I, Kakudo K: A modified rapid Papanicolaou stain for imprint smears. *Acta Cytol*, 48(3):461-462, 2004.
- 186.Tomoda C, Miyauchi A, Uruno T, Takamura Y, Ito Y, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Kuma S, Kuma K, Kakudo K: Cribriform-morular variant of papillary thyroid carcinoma: clue to early detection of familial adenomatous polyposis-associated colon cancer. *World J Surg*, 28(9):886-889, 2004. (被引用数 : 22)
- 187.Wang X, Nakamura M, Mori I, Takeda K, Nakamura Y, Utsunomiya H, Yoshimura G, Sakurai T, Kakudo K: Calcitonin receptor gene and breast cancer: quantitative analysis with laser capture microdissection. *Breast Cancer Res Treat*, 83(2):109-117, 2004.
- 188.Ito Y, Yoshida H, Tomoda C, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: HBME-1 expression in follicular tumor of the thyroid: an investigation of whether it can be used as a marker to diagnose follicular carcinoma. *Anticancer Res* 25(1A):179-182, 2005.
- 189.Ito Y, Yoshida H, Tomoda C, Uruno T, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Kakudo K, Kuma K, Miyauchi A: Expression of S100A2 and S100A6 in thyroid carcinomas. *Histopathology*, 46(5):569-575, 2005.
- 190.Ito Y, Yoshida H, Motoo Y, Iovanna JL, Nakamura Y, Kakudo K, Uruno T, Takamura Y, Miya A, Noguchi S, Kuma K, Miyauchi A: Expression of p8 protein in breast carcinoma; an inverse relationship with apoptosis. *Anticancer Res*, 25(2A):833-837, 2005.
- 191.Ohye H, Fukata S, Kubota S, Sasaki I, Takamura Y, Matsuzuka F, Amino N, Kuma K, Miyauchi A, Kakudo K: Successful treatment for recurrent painful Hashimoto's thyroiditis by total thyroidectomy. *Thyroid*, 15(4):340-345, 2005.
- 192.Nakamura M, Morimoto S, Yang Q, Hisamatsu T, Hanai N, Nakamura Y, Mori I, Kakudo K: Osteoclast-like cells express receptor activity modifying protein 2: application of laser capture microdissection. *J Mol Endocrinol*, 34(1):257-261, 2005
- 193.Nakamura Y, Yasuoka H, Tsujimoto M, Imabun S, Nakahara M, Nakao K, Nakamura M, Mori I, Kakudo K: Lymph vessel density correlates with nodal status, VEGF-C expression, and prognosis in breast cancer. *Breast Cancer Res Treat*, 91(2):125-132, 2005. (被引用数 :60)
- 194.Utsunomiya H, Nakamura M, Kakudo K, Inagami T, Tamura M: Angiotensin II AT(2) receptor localization in cardiovascular tissues by its antibody developed in AT(2) gene-deleted mice. *Regul Pept*, 126(3):155-161, 2005.
- 195.Yasuoka H, Nakamura Y, Zuo H, Tang W, Takamura Y, Miyauchi A, Nakamura M, Mori I, Kakudo K: VEGF-D expression and lymph vessels play an important role for lymph

- node metastasis in papillary thyroid carcinoma. *Mod Pathol*, 18(8):1127-1132, 2005. (被引用数 : 27)
196. Han B, Mori I, Wang X, Nakamura M, Nakamura Y, Kakudo K: Combined small-cell carcinoma of the stomach: p53 and K-ras gene mutational analysis supports a monoclonal origin of three histological components. *Int J Exp Pathol*, 86(4):213-218, 2005.
197. Hishinuma A, Fukata S, Kakudo K, Murata Y, Ieiri T: High incidence of thyroid cancer in long-standing goiters with thyroglobulin mutations. *Thyroid*, 1079-1084, 2005. (被引用数 : 21)
198. Ito Y, Yoshida H, Tomoda C, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Yasuoka H, Kakudo K, Inohara H, Kuma K, Miyauchi A.: Galectin-3 expression in follicular tumours: an immunohistochemical study of its use as a marker of follicular carcinoma. *Pathology*, 37(4):296-298. 2005.
199. Ito Y, Yoshida H, Nakamura Y, Tomoda C, Uruno T, Takamura Y, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Kuma K, Kakudo K, Miyauchi A.: Expression of Jun activation domain-binding protein 1 and p27 (Kip1) in thyroid medullary carcinoma. *Pathology*, 37(3):216-219. 2005.
200. Kusada N, Hara Y, Kobayashi S, Weihua T, Nakamura Y, Kakudo K, Yuasa H: A case of aggressive carcinoma showing thymus-like differentiation with distant metastases. *Thyroid*, 15(12):1383-1388. 2005.
201. Han B, Nakamura M, Zuo G, Ishii A, Nakamura A, Bai Y, Mori I, Kakudo K: Calcitonin inhibits invasion of breast cancer cells: Involvement of urokinase-type plasminogen activator (uPA) and uPA receptor. *Int J Oncol*, 28(4): 807 - 814, 2006.
202. Han B, Mori I, Nakamura M, Wang X, Ozaki T, Nakamura Y, Kakudo K: Myoepithelial carcinoma arising in an adenomyoepithelioma of the breast: case report with immunohistochemical and mutational analysis. *Pathol Int*, 56(4):211 - 216, 2006.
203. Ishii A, Nakamura M, Nakamura A, Takeda K, Han B, Kakudo K: Expression of calcitonin receptor in rat mammary gland during lactation. *Endocr J*, 53(3): 317 - 324, 2006.
204. Ito Y, Yoshida H, Kakudo K, Nakamura Y, Kuma K, Miyauchi A: Inverse relationships between the expression of MMP-7 and MMP-11 and predictors of poor prognosis of papillary thyroid carcinoma. *Pathology*, 38(5): 421 - 425, 2006.
205. Mori I, Ishii A, Nakamura A, Nakamura M, Wang K, Takeda K, Kakudo K: Expression and cellular localization of calcitonin receptor: RT - PCR and in situ Hybridization studies. *Cell Mol Biol*, 52(3): 9 - 13, 2006.
206. Mori I, Han B, Wang X, Taniguchi E, Nakamura M, Nakamura Y, Bai Y, Kakudo K: Mastopathic fibroadenoma of the breast: a pitfall of aspiration cytology. *Cytopathology*, 17(5): 233 - 238, 2006.
207. Nakamura M, Morimoto S, Ishii A, Higuchi T, Ogihara T, Kakudo K: Cytosine-adenine repeat polymorphism at calcitonin gene locus associated with serum osteocalcin level in Japanese women. *Cell Mol Biol*, 52(3): 15 - 18, 2006.
208. Nakamura Y, Yasuoka H, Tsujimoto M, Kurozumi K, Nakahara M, Nakao K, Kakudo K: Importance of lymph vessels in gastric cancer: a prognostic indicator in general and a predictor for lymph node metastasis in early stage cancer. *J Clin Pathol*, 59(1): 77 - 82, 2006. (被引用数 : 21)
209. Nakamura Y, Yasuoka H, Tsujimoto M, Yoshidome K, Nakahara M, Nakao K, Nakamura M, Kakudo K: Nitric oxide in breast cancer: induction of vascular endothelial growth

- factor-C and correlation with metastasis and poor prognosis. *Clin Cancer Res*, 12(4):1201 - 1207, 2006. (被引用数 : 26)
210. Nakamura Y, Yasuoka H, Zuo H, Takamura Y, Miyauchi A, Nakamura M, Kakudo K: Nitric oxide in papillary thyroid carcinoma : induction of vascular endothelial growth factor D and correlation with Lymph node metastasis. *J Clin Endocrinol Metab*, 91(4): 1582 - 1585, 2006.
211. Ota H, Ito Y, Matsuzuka F, Kuma S, Fukata S, Morita S, Kobayashi K, Nakamura Y, Kakudo K, Amino N, Miyauchi A: Usefulness of ultrasonography for diagnosis of malignant lymphoma of the thyroid. *Thyroid*, 16(10) : 983 - 987, 2006.
212. Zhang P, Zuo H, Nakamura Y, Nakamura M, Wakasa T, Kakudo K: Immunohistochemical analysis of thyroid-specific transcription factors in thyroid tumors. *Pathol Int*. 56(5):240 - 245, 2006.
213. Zuo H, Tang W, Yasuoka H, Nakamura Y, Ito Y, Miyauchi A, Kakudo K: A review of 227 cases of small papillary thyroid carcinoma. *Eur J Surg Oncol*, 33(3): 370-375, 2006.
214. Nakamura M, Han B, Nishishita T, Bai Y, Kakudo K. : Calcitonin targets extracellular signal-regulated kinase signaling pathway in human cancers. , 39(6) : 375-384 , 2007.
215. Shiotani A, Kamada T, Kumamoto M, Nakae Y, Nakamura Y, Kakudo K, Haruma K. : Nodular gastritis in Japanese young adults: endoscopic and histological observations. *J Gastroenterol*, 42(8) : 610-615, 2007.
216. Takeda K, Utsunomiya H, Kakiuchi S, Okuno Y, Oda K, Inada K, Tsutsumi Y, Tanaka T, Kakudo K. : Citrus auraptene reduces *Helicobacter pylori* colonization of glandular stomach lesions in Mongolian gerbils. *J Oleo Sci*, 56(5) : 253-262, 2007.
217. Volante M, Collini P, Nikiforov YE, Sakamoto A, Kakudo K, Katoh R, Lloyd RV, LiVolsi VA, Papotti M, Sobrinho-Simoes M, Bussolati G, Rosai J. : Poorly differentiated thyroid carcinoma: The Turin proposal for the use of uniform diagnostic criteria and an algorithmic diagnostic approach. *Am J Surg Pathol*, 31(8) : 1256-1264 , 2007 (被引用数 : 47)
218. Zuo H, Nakamura Y, Yasuoka H, Zhang P, Nakamura M, Mori I, Miyauchi A, Kakudo K. : Lack of association between BRAF V600E mutation and mitogen-activated protein kinase activation in papillary thyroid carcinoma . *Pathol Int.*, 57(1):12-20 , 2007.
219. Hirono S, Tani M, Terasawa H, Kawai M, Ina S, Uchiyama K, Nakamura Y, Kakudo K, Yamaue H: A collision tumor composed of cancers of the bile duct and ampulla of Vater - immunohistochemical analysis of a rare entity of double cancer. *Hepatogastroenterology*, 55(84): 861-864, 2008.
220. Bai Y, Kakudo K, Li Y, Ozaki T, Ito Y, Kihara M, Miyauchi A: Subclassification of non-solid-type papillary thyroid carcinoma identification of high-risk group in common type. *Cancer Sci*, 99(10) : 1908-1915, 2008.
221. Ito Y, Kakudo K, Hirokawa M, Fukushima M, Tomoda C, Inoue H, Kihara M, Higashiyama T, Uruno T, Takamura Y, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Miyauchi A: Clinical Significance of Extrathyroid Extension of the Parathyroid Gland of Papillary Thyroid Carcinoma. *Endocr J*, 145: 100-105, 2008.
222. Sakuma T, Hirota M, Ohashi H, Kakudo K, Kawano K: Extensive Ganglioneuromatosis of Gallbladder. *Int J Surg Pathol*, 2008 Epub ahead of print.
223. Mori I, Nunobiki O, Ozaki T, Taniguchi E, Kakudo K: Issues for application of virtual microscopy to cytoscreening, perspectives based on questionnaire to Japanese

- cytotechnologists. *Diagn Pathol*, 3 : suppl 1: S15, 2008.
224. Mori I, Ozaki T, Tabuse K, Utsunomiya H, Taniguchi E, Kakudo K : Microwave cell death: Molecular analysis using DNA electrophoresis, PCR amplification and TUNEL. *Pathol Int*, 59(5): 294-299, 2009.
225. Bai Y, Kakudo K, Nakamura M, Ozaki T, Li Y, Liu Zhiyan, Mori I, Miyauchi A, Zhou G: Loss of cellular polarity/cohesiveness in the invasive front of papillary thyroid carcinoma and periostin expression. *Cancer Lett*, 281(2):188-195, 2009.
226. Bai Y, Zhou G, Nakamura M, Ozaki T, Mori I, Taniguchi E, Miyauchi A, Ito Y, Kakudo K: Survival impact of psammoma body, stromal calcification, and bone formation in papillary thyroid carcinoma. *Mod Pathol*, 22(7):887-894, 2009.
227. Li Y, Bai Y, Liu Z, Ozaki T, Taniguchi E, Mori I, Nagayama K, Nakamura H, Kakudo K: Immunohistochemistry of IgG4 can help subclassify Hashimoto's autoimmune thyroiditis. *Pathol Int*, 59(9):636-641, 2009.
228. Ito Y, Kakudo K, Hirokawa M, Fukushima M, Yabuta T, Tomoda C, Inoue H, Kihara M, Higashiyama T, Uruno T, Takamura Y, Miya A, Kobayashi K, Matsuzuka F, Miyauchi A. Biological behavior and prognosis of familial papillary thyroid carcinoma. *Surgery*, 145(1):100-105, 2009.
229. Nakamura M, Ozaki T, Ishii A, Konishi M, Tsubota Y, Furui T, Tsuda H, Mori I, Ota K, Kakudo K: Calcitonin induces connective tissue growth factor through ERK1/2 signaling in renal tubular cells. *Experimental & Molecular Medicine*, 41(5):307-315, 2009.
230. Nunobiki O, Nakamura M, Taniguchi E, Utsunomiya H, Mori I, Tsubota Y, Mabuchi Y, Kakudo K: Adrenomedullin, Bcl-2 and microvessel density in normal, hyperplastic and neoplastic endometrium. *Pathol Int*, 59(8):530-536, 2009.
231. Matsuno A, Katakami H, Okazaki R, Yamada S, Sasaki M, Nakaguchi H, Yamada SM, Hoya K, Murakami M, Iwasaki H, Kuyama J, Kakudo K: Skull base metastasis from follicular thyroid carcinoma. - two case reports- *Neurol Med Chir(Tokyo)*, 50:421-425, 2010.
232. Liu Z, Bai Y, Li Y, Ohba K, Nakamura H, Ozaki T, Taniguchi E, Mori I, Kakudo K: Non-solid type thyroid carcinoma: a case report of moderately differentiated adenocarcinoma of the thyroid. *Pathol Int*, 60:524-527, 2010.
233. Ozaki T, Nagashima K, Kusakabe T, Kakudo K, Kimura S: Development of thyroid gland and ultimobranchial body cyst is independent of p 63. *Lab Invest*, 91(1):138-146, 2010.
234. Ito Y, Miyauchi A, Kakudo K, Hirokawa M, Kobayashi K, Miya A: Prognostic significance of Ki-67 labeling index in papillary thyroid carcinoma. *World J Surg*, 34:3015-3021, 2010.
235. Li Y, Nishihara E, Hirokawa M, Taniguchi E, Miyauchi A, Kakudo K: Distinct clinical, serological, and sonographic characteristics of Hashimoto's thyroiditis based with and without IgG4-positive plasma cells. *J Clin Endocrinol Metab*, 95(3):1309-1317, 2010.
236. Liu Z, Zhou G, Nakamura M, Koike E, Li Y, Ozaki T, Mori I, Taniguchi E, Kakudo K: Encapsulated follicular thyroid tumor with equivocal nuclear changes, so called well-differentiated tumor of uncertain malignant potential: a morphological, immunohistochemical and molecular appraisal. *Cancer Sci*, 102:288-294, 2011.
237. Liu Z, Zhou G, Nakamura M, Bai Y, Li Y, Ozaki T, Mori I, Miyauchi A, Kakudo K. Retinoid X receptor up-regulation is correlated with dedifferentiation of tumor cells and lymph node metastasis in papillary thyroid carcinoma. *Pathol Int*, 2011, in press
238. Liu Z, Kakudo K, Bai Y, Li Y, Ozaki T, Miyauchi A, Taniguchi E, Mori I. Loss of cellular polarity/cohesiveness in the invasive front of papillary thyroid carcinoma, a novel

predictor for lymph node metastasis-possible morphological indicator of epithelial mesenchymal transition. J Clin Pathol, 2011, in press

代表的日本語原著論文

1. 覚道健一、桜井幹巳、宮地徹、桑島正道：アルコール性硝子体とオルセイン陽性HBs抗原を認めた肝硬変症の一部検例、肝臓 16：884-888, 1975.
2. 高井新一郎、荻原俊男、宮内昭、東弘、西村健、覚道健一：異所性ACTH症候群を呈した甲状腺髄様癌の一例. 内分泌学会雑誌, 53:1279-1291, 1977.
3. 覚道健一、片山正一、宮地徹、宮内昭、高井新一郎、隈寛二：家族性早期甲状腺髄様癌の電顕的検討 多中心性傍濾胞上皮細胞過形成、癌の臨床 23:167-171, 1977.
4. 覚道健一、八十嶋仁、桜井一成、瀬野武、森慈喜、松塚文雄。黒色甲状腺の3剖検例. 病理と臨床、3:525-529,1985.
5. 宮内昭、堀川真一、大鶴実、覚道健一甲状腺髄様癌から転化したと思われる甲状腺の悪性黒色腫の一例. 内分泌外科、4:219-223, 1987.
6. 宮内昭、隈寛二、松塚文雄、平井啓介、石川浩、前田昌純、片山正一、覚道健一：甲状腺内胸腺腫の6例. 内分泌外科 6:289-295, 1989.
7. 谷口恵美子、高松純太、圓井知恵、鍵弥朋子、布引治、尾崎敬、森一郎、覚道健一：「良悪性鑑別困難」の細分類 腺腫様結節の細胞所見と濾胞性腫瘍の細胞所見 日本臨床細胞学会雑誌、49:61-66,2010.

代表的総説外国語

1. Shan L, Nakamura Y, Nakamura M, Yokoi T, Kakudo K : Genetic alterations in the primary and secondary hyperparathyroidism. Pathol Int, 48 : 569-574, 1998.
2. Kakudo K and Shan L: Recent advances in the molecular pathology of hyperparathyroidism. Endocrine Pathology 10:3-13, 1999.
3. Jing X, Yokoi T, Kakudo K: Pulmonary capillary hemangiomas:A controversial entity in vascular pathology of the lung. Labmedica Int(Critical Care:Review Article) 9(5):17-19, 1999.
4. Nakamura M, Morimoto S, Ogihara T, Kakudo K : The worldwide controversy about the polymorphism of the vitamin D receptor gene and bone mineral density. Medical Hypothesis, 54: 495-497, 2000.
5. Mori I, Yang Q, Kakudo K: Predictive and prognostic markers for invasive breast cancer. Pathol Int 52(3): 186-194, 2002. (被引用数 : 28)
6. Nakamura M, Kakudo K: Recent advances in the molecular biology of the calcitonin receptor. Sci Res Flash Mol Endocrinol 1: 15-28, 2002.
7. Yang Q, Sakurai T, Kakudo K: Retinoid, retinoic acid receptor and breast cancer. Breast Cancer Res Treat 76(2): 167-173, 2002. (被引用数 : 25)
8. Yang Q, Nakamura Y, Yasuoka H, Nakamura M, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Vascular endothelial growth factor-C in breast cancer. Res. Adv. in Cancer 2: 159-165, 2002.
9. Yang Q, Yoshimura G, Sakurai T, Kakudo K: The Fragile Histidine Triad gene and breast cancer. Med Sci Monit 8(7): RA140-144, 2002.
10. Yang Q, Yoshimura G, Mori I, Sakurai T, Kakudo K: Thymidine phosphorylase and breast carcinoma. Anticancer Res 22(4): 2355-2360, 2002.
11. Han B, Nakamura M, Mori I, Nakamura Y, Kakudo K: Urokinase-type plasminogen activator system and breast cancer (Review). Oncol Rep 14(1):05-12,2005. (被引用数 :)

43)

12. Nakamura M, Han B, Nunobiki O, Kakudo K: Adrenomedullin: a tumor progression factor via angiogenic control. *Curr Cancer Drug Targets*. 6(7): 635 - 643, 2006.
13. Zhang P, Zuo H, Ozaki T, Nakagomi N, Kakudo K: Cancer stem cell hypothesis in thyroid cancer. *Pathol Int*. 56(9): 485-489, 2006. (被引用数 : 20)
14. Kakudo K, Bai Y, Katayama S, Hirokawa M, Ito Y, Miyauchi A, Kuma K: Classification of follicular cell tumors of the thyroid gland: Analysis involving Japanese patients from one institute. *Pathology International* 59:359-367, 2009.
15. Li Y, Nakamura M, Kakudo K: Targeting of the BRAF gene in papillary thyroid carcinoma (Review). *Oncology Reports* 22:671-681, 2009.
16. Li Y, Nishihara E, Kakudo K: Hashimoto's thyroiditis: old concepts and new insights. *Curr Opin Rheumatol*, 23:102-107, 2011.
17. Kakudo K, Li Y, Hirokawa M, Mori I: Diagnosis of Hashimoto's thyroiditis and IgG4-related sclerosing disease. *Pathol Int*, in press

代表的総説日本語

1. 覚道健一、北村旦、宮内昭、高井新一郎：C細胞の病理 C細胞過形成と甲状腺髄様癌について *医学の歩み* 105 : 203-206 , 1978.
2. 覚道健一：Minocyclineとblack thyroid。 *医学の歩み*、127:798-798, 1983.
3. 覚道健一：甲状腺髄様癌： その臨床病型と生物学的予後。 *医学の歩み* 136:718-719,1986.
4. 覚道健一：甲状腺ホルモナーカルシトニンとカルシトニン遺伝子関連ペプチド (CGRP) 病理と臨床、6:191-200, 1988.
5. 覚道健一：甲状腺髄様癌 (C細胞癌) 形態学的特色と腫瘍マーカーについて *病理と臨床* 6:778-784, 1988.
6. 覚道健一、中村靖司、横井豊治：濾胞癌と濾胞腺腫、*医学の歩み*, 176:509-511,1996.
7. 覚道健一：甲状腺癌、*病理と臨床* 14:579-579, 1996.
8. 覚道健一、中村靖司、長沼廣、小山徹、黒住昌史、菅野純、樋口佳代子、廣川満良：オペレーターバリエーション。*病理と臨床* 14:580-582, 1996.
9. 黒住昌史、坂本充弘、覚道健一：甲状腺乳頭癌の核所見：核の超微形態像と光顕所見の比較。*内分泌外科*、14:273-276, 1997.
10. 中村美砂、覚道健一：レセプターと骨粗鬆症 カルシトニン受容体とポリモルフィズム、*医学のあゆみ* 186(13):917-920,1998.
11. 覚道健一、単良：副甲状腺機能亢進症における遺伝子異常。 *病理と臨床* 16:671-675, 1998.
12. 覚道健一、甲状腺濾胞性腫瘍の診断、*病理と臨床*、17:66-67,1999.
13. 谷口恵美子、森一郎、覚道健一：乳癌検診の今後 細胞診の実際、*産婦人科の実際* 48(9):1237-1241, 1999.
14. 唐衛華、森一郎、中村靖司、覚道健一：内分泌臓器の早期癌・境界病変「甲状腺」、*病理と臨床[臨時増刊号]* 19 : 174-180 , 2001.
15. 越川卓、鳥屋城男、広川満良、加藤良平、石原明夫、覚道健一、坂本穆彦：甲状腺濾胞性腫瘍の細胞診断における問題点 新しい報告様式の提唱、*日本臨床細胞学会雑誌* 41(5): 360-367, 2002.
16. 森一郎、尾崎敬、田伏克淳、覚道健一、microwave と細胞死 これまで知られていなかった細胞死の型、*J Microwave Surg*, 21:17-23, 2003.
17. 中村美砂、覚道健一、楊基峰、梅村定司：プロモーター遺伝子多型と乳癌。臨床検査

- 47:1001-1003, 2003.
18. 森一郎、谷口恵美子、覚道健一：細胞診の読み方と限界 濾胞性腫瘍を中心として、臨床外科 59(4): 401-404, 2004.
 19. 覚道健一、安岡弘直、中村靖司、唐衛華、谷口恵美子、宮内昭、伊藤康弘：乳頭癌の多様性 - 再発しない例を予想できるか？ 内分泌外科 21(3): 188-191, 2004.
 20. 覚道健一、安岡弘直、中村靖司：甲状腺病理コンサルテーションシステム. 病理と臨床、22:1162-1165, 2004.
 21. 越川卓、広川満良、隈晴二、覚道健一、加藤良平、坂本穆彦、宮内昭：甲状腺細胞診のガイドライン：新しい報告様式,病理と臨床23(1):33-38, 2005
 22. 覚道健一、白 艶花、李 亜瓊、若狭朋子、森 一郎：甲状腺癌 分化癌・低分化癌・未分化癌、日本臨床,65(11)：1979-1984, 2007.
 23. 覚道健一、尾 敬、谷口恵美子、森一郎：甲状腺癌における遺伝子異常. 細胞 40(14): 17-19, 2008.
 24. 覚道健一、尾 敬、谷口恵美子、森一郎：濾胞癌病理診断の問題点. 内分泌外科 25(1): 3-6, 2008.
 25. 覚道健一、尾 敬、谷口恵美子、森一郎: 甲状腺腫瘍の病理. 特集 甲状腺腫瘍へのアプローチ. 内分泌・糖尿病科. 29:194-200, 2009.
 26. 覚道健一、尾 敬、亀山香織、中村美砂: 家族性大腸腺腫症における甲状腺病変. 遺伝性内分泌腫瘍の基礎と臨床 遺伝カウンセリングに必要な知識 ホルモンと臨床 57:77-82,2009
 27. 覚道健一、亀山香織、伊藤公一、中村浩淑: 濾胞性腫瘍の細胞診断ガイドライン作成に向けて. 日本臨床細胞学会雑誌, 49:37-41, 2010.
 28. 覚道健一、森一郎：甲状腺低分化癌 . 病理と臨床、28:296-297,2010.
 29. 森一郎、覚道健一：特集 2 甲状腺腫瘍の基礎と診断、甲状腺腫瘍病理診断の諸問題.日本甲状腺学会雑誌、1:122-125, 2010.

著書外国語

1. Kakudo K : C cell disease of the thyroid. Subclassification and prognostic factors of medullary (C cell) carcinoma of the thyroid., Endocrine Pathology Update ed, J Lechango and T. Kameya, Field and Wood : 85-97, 1990.
2. Yang Q, Li H, Sun J, Yoshimura G, Sakurai T, Kakudo K: Chapter 1: The Molecular Biology of Breast Carcinoma. Focus on breast cancer research / Yao AP (editor), Nova Science Publishers, Inc., New York, pp.1-27, 2004
3. 「甲状腺病理と臨床」, 周庚寅, 覚道健一編, 人民工生出版社, 2005. 中国語
4. Zuo H, Tang W, Kakudo K: Prognostic factors of papillary carcinoma of the thyroid. Transworld Research Network, in Recent advances in thyroid cancer research, editor Ito Y and Miyauchi A , pp. 33 - 48, 2006.
5. Endocrine Pathology: Differential Diagnosis and Molecular Advances, Second Edition, editor Ricardo V. Lloyd, Springer, 2010.
6. E-Book, Molecular Mechanism and Morphology in Cancer, Editor Nakamura M and Kakudo K, Bentham Sci, 2010. <http://www.bentham.org/ebooks/9781608050374/contents.htm>

著書日本語

1. 取り扱い規約に沿った腫瘍鑑別診断アトラス、甲状腺、編集坂本穆彦、文光堂、1991年
2. 臨床内分泌病理診断学、笹野伸昭編、医師薬出版、1994年
3. 治療のための病理診断学、青笹克之ほか編集、南山堂、1994年
4. 細胞診のベーシックサイエンスと臨床病理、編集坂本穆彦、医学書院、1995年
5. 移植コーディネーターテキストブック、若杉長英編、日本腎臓移植ネットワーク・コーディネーター委員会、1995年。
6. 現代病理学体系、補遺 1、内分泌腫瘍診断における免疫組織化学の応用、飯島宗一編、中山書店、1995年
7. 新病理学入門、北村幸彦ほか編集、南山堂、1997年
8. 細胞診を学ぶ人のために、1-3版、医学書院
9. 甲状腺癌取り扱い規約、5版、6版、甲状腺外科学会編、金原出版
10. 標準病理学、1-5版、医学書院
11. 内分泌外科標準手術アトラス、インターメルク社、日本内分泌外科学会編、2003
12. ダイナミック病理学、西村書店、2010

その他

1. メキシコにおける古代文化と風土病調査報告 イッツァ・ムーナを求めて、第1次医学踏査隊 和歌山県立医科大学探検部（熱帯医学研究会）1772年3月1日発行
2. 免疫組織化学文献速報、学際企画、東京、1989-1992年
3. 細胞診用語解説集、日本臨床細胞学会編集、医学書院、1997年
4. 覚道健一：医学生のための進路ナビ、私はなぜ現在の科目を選んだか、病理学、日本医事新報社 61-63, 1999.
5. 単良、覚道健一：副甲状腺機能亢進症のclonalityと病理、Knack & Pitfalls, 内分泌外科の要点と盲点、文光堂 151, 1999.
6. 覚道健一：細胞診講習会ハンドアウト 1-20, 2001, 日本病理学会認定病理医部会
7. 医学大辞典、医学書院、2003年
8. 覚道健一：保健師教育に期待するもの、保健学科閉学記念誌「未来へ」、和歌山県立高等看護学院、和歌山、pp.20, 2007.
9. 平成16年度・平成17年度学生自主カリキュラム報告、私たちはこんな面白いことをしました。和歌山県立医科大学教務学生委員会
10. 病理コア画像、<http://jsp.umin.ac.jp/corepictures2010/>, 日本病理学会教育委員会編、2010

博士（医学）学位授与者と学位論文

- 1 . 射手矢巖：ラット甲状腺C細胞におけるCT合成能とC細胞増殖能に対する 合成サケカルシトニン（TZ-CT）の作用。和歌山医学42；849～858, 1991.
- 2 . 東家一雄：食虫目スルクス口蓋扁桃の免疫組織化学的性状に関する研究。和歌山医学, 43:359-369, 1992.
- 3 . 風呂谷匡彦：マウス脾樹状細胞による免疫応答調節機構の解析。和歌山医学, 43:381-390. 1992.
- 4 . 梁瀬能三：骨軟部腫瘍における癌遺伝子・癌抑制遺伝子の研究。和歌山医学, 44:207-214,1993.
- 5 . Nakamura M et al.: A new type of human calcitonin receptor isoform generated by alternative splicing. *Biochem Biophys Res Comm*, 209:744-751, 1995.
- 6 . 石原靖士：大腸がんにおける線維芽細胞増殖因子受容体1発現に関する研究。和歌山医学, 48：427 - 436 , 1997 .
- 7 . Shang L et al: Comparative analysis of clonarity and pathology in primary and secondary hyperparathyroidism. *Virch Arch*, 430:247-251, 1997.
- 8 . Jing X et al: Extensive intraductal component and estrogen receptor status in breast cancer. *Pathol Int*, 48:440-447, 1998.
- 9 . Kai M et al: Quantitative and qualitative analysis of stain color using RGB computer color specification. *Analyt Quant Cytol Histol*, 21:447-480, 1999.
- 10 . Yang Q et al: Biallelic inactivation of retinoic acid receptor 2 gene by epigenetic change in breast cancer. *Am J Pathol*, 158:299-303, 2001.
- 11 . Tang W et al: Differentiation, proliferation and retinoid receptor status in papillary carcinoma of thyroid. *Pathol Int*, 53:204-213,2003.
12. Ozaki T et al: Microwave cell death: Immunohistochemical and enzyme histochemical evaluation. *Pathol Int*, 53:686-692,2003.
13. Nunobiki O et al: Significance of hormone receptor status and tumor vessels in normal, hyperplastic and neoplastic endometrium. *Pathol Int*. 53(12):84652, 2003.
14. Wang X et al: Calcitonin receptor gene and breast cancer: quantitative analysis with laser capture microdissection. *Breast Cancer Res Treat*, 83:109-117, 2004.
15. Ishii A et al: Localization of calcitonin receptor m RNA in rat kidney; an in situ hybridization study. *Acta Histochem Cytochem*, 37:259-265, 2004
16. Yasuoka H et al: VEGF-D expression and lymph vessels play an important role for lymph node metastasis in papillary thyroid carcinoma. *Mod Pathol*, 2005.
17. Han B et al: Calcitonin inhibits invasion of breast cancer cells: Involvement of urokinase-type plasminogen activator(uPA) and uPA receptor. *Int J Oncol*, 28:807-814, 2006.
18. 樋口智紀、森一郎、中村美砂、中村靖司、尾崎敬、覚道健一：エラスチンとの接触はマクロファージのTNF発現を誘導し、動脈硬化発祥に寄与する。脈管学, 46:3-10,2006.
19. Zhang P et al: Immunohistochemical analysis of thyroid-specific transcription factors in thyroid tumors. *Pathol Int*, 56:240-245, 2006.
- 20 . Zuo H et al: Lack of association between BRAF V600E mutation and mitogen-activated protein kinase activation in papillary thyroid carcinoma. *Pathol Int*, 57: 12-20, 2007.
21. Takeda K, et al: Citrus Aurapten reduces *Helicobacter pylori* colonization of glandular

- stomach lesions in Mongolian Gerbils. *J Oleo Science*, 56(5):253-260, 2007.
22. Bai Y et al: Survival impact of psammoma body, stromal calcification and bone formation in papillary thyroid carcinoma. *Mod Pathol*, 22:887-894, 2009.
23. Li Y, Nishihara E, Hirokawa M, Taniguchi E, Miyauchi A, Kakudo K: Distinct clinical, serological, and sonographic characteristics of Hashimoto's thyroiditis based with and without IgG4-positive plasma cells. *J Clin Endocrinol Metab*, 95(3):1309-1317, 2010.
24. Leu Z, Zhou G, Nakamura M, Koike E, Li Y, Ozaki T, Mori I, Taniguchi E, Kakudo K: Encapsulated follicular thyroid tumor with equivocal nuclear changes, so called well-differentiated tumor of uncertain malignant potential: a morphological, immunohistochemical and molecular appraisal. *Cancer Sci*, 102:288-294, 2011.

修士（医科学）授与者

鍵弥朋子、
佐藤小百合、
西上圭子

他大学、他部門より学位を取得した教室員

岩崎新：兵庫医科大学より

Iwasaki A et al: Quantitative analysis of stromal fat content of human parathyroid Glands associated with thyroid diseases using computer image analysis. *Pathol Int*, 45:483-486, 1995.

瀬川直樹：大阪医科大学より

Segawa N et al: Phosphorylation of mitogen-activated protein kinase is inhibited by calcitonin in DU145 prostate cancer cells. *Cancer Res*, 61:6060-6063, 2001.

中込奈美：兵庫医科大学より

Nakagomi N and Hirota S: Juxtamembrane-type c-kit gene mutation found in aggressive systemic mastocytosis induces imatinib-resistant constitutive KIT activation. *Lab Invest*, 87:365-371, 2007.

白艶花：山東大学より第2の学位

Bai Y et al: Loss of cellular polarity/cohesiveness in the invasive front of papillary carcinoma and periostin expression, *Cancer Lett*, 281:188-195, 2009.

送り出した教員研究者

栗林恒一（1980-1990年）関西医療大学教授
森川吉博（1986-1993年）和歌山県立医科大学第2解剖准教授
東家一雄（1986-1992年）関西医療大学教授
築瀬能三（1988-1992年）和歌山県立医科大学整形外科講師
松浦成昭（1990-1995年）大阪大学医学部保健学科教授
横井豊治（1994-1999年）愛知医大病院病理学教授 病院病理部担当
中村美砂（1992-2000年）大阪河崎リハビリテーション大学教授
谷口恵美子（1992-2011年）和歌山県立医科大学病理学助教
宇都宮洋才（1993-1999年）和歌山県立医科大学機能性医薬食品探索講座准教授
単良（1993-1999年） 米国Howard大学助教授のちNCBI, NIH
荊雪楓（1993-1998年） 和歌山県立医科大学分子医学助教
中村靖司（1995-2007年）和歌山県立医科大学臨床検査医学准教授
楊其峰（1999-2004年） 中国 山東大学乳癌外科教授
布引治（1998-2005年） 神戸常磐大学講師
尾崎敬（1999-2011年） 和歌山県立医科大学病理学講師
森一郎（1999-2011年） 和歌山県立医科大学病理学准教授
安岡弘直（2000-2006年）和歌山県立医科大学臨床検査医学助教
韓 博（2002-2006年） 中国 山東大学病理学教授
樋口 智紀（2002-2006年）近畿大学医学部細菌学教室 助教
白艶花（2005-2009年） 中国 北京腫瘍医院、北京大学臨床腫瘍学院
李亜瓊（2006-2010年） 和歌山県立医科大学 学内助教
若狭朋子（2007-2008年）大阪赤十字病院 病理部
奥野 祥治（2007-2009年）和歌山工業高等専門学校物質工学科 助教
劉志艶（2007-2011年） 中国 山東大学病理学講師

専門医、認定資格取得者：

病理専門医 取得者6名

中村靖司、小野一雄、安岡弘直、尾崎敬、明石高明、中込奈美

細胞診専門医取得者 7名

中村靖司、小野一雄、安岡弘直、尾崎敬、明石高明、中込奈美、宇都宮智子

細胞検査士資格取得者 12名

新井昇一、造酒仁志、西村千恵子、鍵弥朋子、寒川月久美、樋口（前川）観世子、大上（紙谷）知子、藪内（末本）優子、圓井知江、佐藤（清水）小百合、山内直樹、小田井学、

2級病理臨床検査技師認定試験合格者19名

新井昇一、中村圭吾、造酒仁志、西村千恵子、南浦美穂子、鍵弥朋子、林寛子、寒川月久美、樋口（前川）観世子、大上（紙谷）知子、藪内（末本）優子、圓井知江、井畑孝敏、佐藤（清水）小百合、高橋信明、山内直樹、小田井学、西上圭子、四宮千恵

覚道健一教授ご退官に寄せて

和歌山県立医科大学 理事長・学長 板 倉 徹

Ancora imparo

このたび和歌山県立医科大学第二病理学教授覚道健一先生が退官されます。今日までの本学に対する先生のご貢献に大学を代表して感謝の意を表します。本学の発展のためにも協力して尽力したものとして、その別れは悲しいものですが、先生の明るい前途を祈念してお別れの言葉を送ります。

覚道健一先生は本学第二病理学教授として永年にわたり、研究・教育・大学の管理運営にご尽力いただきました。本学での先生のご活躍はまさに「生涯勉強」というにふさわしい日々研鑽の結果といえます。ルネッサンスの巨匠ミケランジェロは88歳になって「今何をしているのですか」と聞かれたときに「ancora imparo」と答えています。「まだまだ勉強中です。生涯勉強です。」という意味です。これほどの巨匠をもってしても、まだ勉強が必要、と言わしめています。覚道教授も学生に対する教育、研究の両面において、すでにご高名な教授でありながら ancora imparoを実践されたように思います。その研究者としての真理探究の真摯な態度は若い研究者の範というにふさわしいものでした。

第二病理学教授としての研究、教育へのご貢献のみならず、図書館長、学生部長として、本学の管理運営に情熱を傾けられ、本学発展への有能な牽引者の一人でした。今回、ご退官されることは、本学にとって多大な損失であります。先生の偉大なご功績を次世代を担う若者が必ずや継いでくれるものと確信します。先生にはこれから本学の外から様々なご助言やご指導をいただきますよう切にお願いするところです。いつまでもご健康で ancora imparoの精神を続けていってください。

教育者、研究者、そして管理運営者として

副学長、衛生学教授 宮 下 和 久

覚道健一教授は、平成2年、母校の第2病理学教室に教授として戻られ、永きにわたって、大学の発展のために尽力されました。この間、教育、研究者としての活躍はもちろん、大学のすぐれた管理運営者としてもご活躍されました。平成10年から14年にわたり、図書館長を2期、さらに、平成16年から18年の間、学生部長を1期つとめられました。

平成10年には、紀三井寺新キャンパスに統合移転がなされ、文字どおり新しい図書館運営が託された時期であり、また、平成16年には、看護短期大学部が保健看護学部として改組され、二学部体制下での学生部が発足した大学の節目の時期でありました。先生は過去の慣習に必ずしもとらわれない、進歩的かつ建設的な考え方でリーダーシップで見事重責を果たされたことが印象深く残っております。

本学教授の任期を残されてのご退職は誠に残念ですが、先生のこれからの益々のご活躍を心より祈念申し上げます。

人は働くことが良薬

和歌山県立医科大学 名誉教授 山 本 博 之

このたび覚道健一教授が定年より2年早く20年余り務められた和歌山県立医科大学をご退職されるとのこと、この難しい時代に個性豊かに立派に教授職を全うされたことに先ずお祝いを申

し上げ、また私が大学執行部を担当した時期には図書館長や学生部長として大学の管理運営にご尽力いただきお礼を申し上げたいと思います。今、覚道教授とご一緒した頃の懐かしい楽しかった良き時代に思いを馳せながら、覚道教授のこれからの新しい職場への門出に心からのエールを送ります。

覚道教授が和歌山県立医科大学に教授としてご就任された1990年は、大学の移転整備構想の打ち上げから長い年月にわたる紆余曲折の後にやっと移転用地が紀三井寺に決定した後の2年後であったと思います。大学の統合移転整備工事は1999年に竣工しましたので、覚道教授ご在職の前半の約10年間は、移転整備の基本計画や実施計画などの策定、さらには移転作業など移転整備事業に関わる諸々のことに多くの時間を費やされたことと思います。改めてご苦労さまでしたと申し上げたいと思います。

人は年を重ねると共に体力、気力が衰え、健康について意識せざるを得なくなります。健康についてはWHO憲章(1957)においてHealth is a state of complete physical, mental and social well-being state and not merely the absence of disease or infirmity と定義されていますが健康の達成維持には多くの要因が関与しています。Nightingale(1820-1910)は晩年の論文でHealth is not only to be well, but to be able to use well every power we haveと健康づくりの具体的な一つの指針を提示しています。

年齢と共に休養日を増やして体力、気力を充電し、体力、気力に合わせて頭と体を使い働くように努めることが健康には不可欠であるとの考えだと理解しています。

覚道教授のこれからの新しい生活が健康で充実したものとなることを祈念し、Nightingaleの言葉を送ります。第2ステージは元気で楽しみながら働きましょう。

退任を記念して

和歌山県立医科大学名誉教授 岸和田徳洲会病院救急救命センター 篠崎 正 博

覚道健一先生、21年間和歌山県立医科大学第二病理学教授として勤められ、ご苦労さまでした。昨年11月に神戸で第49回日本臨床細胞学会秋期大会を主催され、今後さらに和歌山医大のみでなく病理学会でご活躍をされると期待していましたが、平成23年3月でまだ定年に数年残し、ご退任されると聞き、たいへん驚きましたが、また先生らしいとも思いました。

私と覚道教授との出会いは昭和43年私がバレー部のキャプテンをしているときに、新入生としてバレー部へ入部されてからです。通常、クラブのキャプテンは4年生ですが、私は2年生の西医体後、キャプテンに指名されました。覚道先生ら2名の新入クラブ員を迎え、他大学との交流戦を行ったりして張り切り過ぎ、風邪をこじらせ、その後持病の肺結核となり、5月から休学したために覚道先生とは1ヵ月しか一緒にバレーをすることができませんでした。平成元年に私は久留米大学救急救命センターから和歌山医大高度集中治療部助教授として戻ってきましたが、翌年覚道先生が東海大学から第二病理学の教授としてご就任されました。バレー部の部長であった矢高勲第二内科教授の後をうけ、覚道先生がバレー部の部長を引き受け、バレー部を引っ張ってこられました。しかしながら、私が平成11年に教授になると、覚道先生は、「バレー部の部長をよろしく願います。」と私に部長を譲られました。昨年、覚道先生から「私は来年退職します。」と言葉少なく、さわやかに言われましたが、常に思慮深く、理論整然としたすばやい判断からの先生らしい決断ではないかと思いました。

覚道先生は多くの研究生、大学院生および外国からの留学生を受け入れ、活発な研究をされ、多くの研究論文を公表されており、多くの博士学位取得者、修士を指導されております。また、病理学を担う病理専門医、細胞診専門医、細胞検査士を育成されています。病理学教室は、基礎部門の中でも最も臨床との結びつきがあり、病理細胞診断、術中、術後の組織診断、病理解剖など幅広く、また、県下の関連病院との間でTelepathology、Telecytologyのネットワークを設けられており、臨床でも貢献されてきました。私は高度集中治療センターおよび救急集中治療部で重症の急性疾患の診療を行ってきたために、全科で最も多く覚道先生に病理解剖および

CPCをおこなってもらったのではないかと考えております。さらに、大学では図書館長を歴任され、大学の運営にもご尽力されました。

最後に長年のご奮闘、ご活躍に敬意を表し、今後の人生に幸あることをお祈り申し上げます。

ご挨拶

和歌山県立医科大学名誉教授 分子病理学前教授 大 島 章

覚道先生が和歌山県立医科大学の第二病理学教授候補に選出された後、当時の松下学長と一緒に割愛願いのために伊勢原の東海大学医学部を訪れ、先生とお会いしたことが昨日のように思い出されます。先生が1990年に赴任されてから私の退職まで14年間ご一緒したことになります。大学はシステムの上で講座制をとっており、ともすれば教授の意向が全面にすぎ、偏ってしまう傾向があります。特に第一、第二と分かれた病理学のような複合講座では裾野の広い病理学の全体像を描き、それぞれの講座が特色を生かせる環境づくりが必要だと私は今でも信じていますが、覚道先生に最も感謝していることは講座の垣根を取り払い、本音で話し合いができたことです。当然、意見の違いはでてきましたが、私は覚道先生の人体病理学への造詣が深く、信念に強烈な印象を覚え、私の病理学の考え方に大きな影響を与えました。またある時は講座の間で難しい人事の移動など快く了承してもらったこともあります。

覚道先生が和歌山県立医科大学でなされたことは数多い研究業績にとどまらず外国人留学生、大学院生の指導、病理学会の主催、病院業務にたずさわる臨床検査技師、細胞検査師の育成にまでおよんでいます。また要職の学生部長、図書館長も立派に勤められ大学の管理運営面で大きく貢献されました。

大学にまだ留まって欲しいという気持ちは重々ですが、退職後、教育面で全力を尽くしたいという先生の御意向を前に伺っていますので、いまは先生の思いがはやく成就するよう心から念じたいと思います。私も退職後、アメリカのNCIから昨年、韓国ソウルの研究所に移りました。何年か後に先生とお会いし、また以前のような率直な意見交換できる日が来ることを楽しみにしています。本当に長いあいだご苦労様でした。そしてありがとうございました。

Laboratory of Cell Regulation and Carcinogenesis
CHA Cancer Institute
605 Yeoksam-dong, Gangnam-gu, Seoul, South Korea 135-081,

学道上人

和歌山県立医科大学名誉教授 西 岡 新 吾

覚道教授、長い間我らが母校和歌山県立医科大学と病理学の発展に御尽力され、御苦労様でした。

思い起せば当大学第二病理学教授に就任されて間もなく、当時第二内科の助教授でありました私に挨拶が見えられました。教授が助教授に？先輩後輩の！その謙虚さに心打たれ強く印象に残っています。

覚道教授はその名の如くお坊さんをしのばせる卓越したお人柄であり 昔泉南新家に学道（覚道）という偉い僧侶がおられ地域の医療や教育に尽くした、真摯、温厚、磊落、飄々としたお人柄は常人には考えもつかない大きな人物であり（ご自身はコスモポリタンと申されていますが）、学問、臨床病理に無心に情熱を傾け多くの弟子を育て慕われ、その姿を見るにつけ励まされて参りました。それでいて先生にお目にかかるだけで心安まり（心休まり？）種々お

話を聞いていただいたり感謝するばかりです。

縁とは不思議なもので覚道教授の奥様の御祖父と私の父とは京都大学で同級、同じ生化学教室の同門であり、親友でもあったと二人の間柄を折に触れ母から聞いておりました。後に和歌山大学で教えを頂き、今でも奥様の伯母様淳子様とも懇意にしております。

先生の病理学的考察は私共臨床医、特に内科医の基礎であります。これからもよろしく御指導お願い致します。

今後は近くの神戸に赴かれ、若い人達の教育に従事されるとお伺いしておりますが、お互いに若い心だけは失わずお付き合いして頂けたらと願っています。どうかこれまで通り元気で自分を大切に頑張ってください。

覚道先生、長い間の教授生活ご苦労様でした。

和歌山県立医科大学附属病院院長・心臓血管外科学教授 岡村 吉隆

私の専門は心臓外科で、悪性腫瘍が少ないからか病理学教室とはあまり密接な関係はありませんでした。そのため、覚道先生と言えば私の中では、昨年12月に一緒に中国を訪問した5日間が最大の思い出です。山東大学の中心的存在である齊魯医院の120周年記念式典に招待された話です。尖閣列島やレアアースの禁輸などギクシャクした日中関係の影響で、半年前に招待の話があった後、音信が途絶え、1ヶ月前になって急遽訪問が決まった経緯がありました。日程も明かされず、訪問直前になって病院の紹介や日本の卒後研修制度などについて講演してほしいとの要望が届き、不安だらけの出発でした。公式行事は3日間に及び、日本では想像できないほど大規模な記念式典で、VIP待遇で歓迎していただきました。しかしそれ以上に、感激したことがあります。覚道先生の下で研究した留学生達が、大勢集まってきて、公式行事の合間をぬって我々を食事や観光に同行してくれ、普通では経験できないような時間が過ごせました。覚道先生の10年以上に及ぶ留学生の指導と、10回近くになると言う山東大学訪問の実績の賜物でした。覚道先生からは、この実績を引き継いでますます交流を深めて欲しいとのメッセージを受けています。了解しました。機会がありましたらまた一緒に山東大学を訪問できればと願っています。



覚道健一教授の御退職に際して

和歌山県立医科大学・医学部・生理学第2講座 教授 前田 正信

覚道健一教授、御退職おめでとうございます。

私は平成12年9月に和歌山県立医科大学に赴任してきましたが、それ以後覚道先生とは親しくお話をさせていただいております。覚道先生は、本学御出身ですが、国立大学（大阪大学）や私立大学（兵庫医科大学、東海大学）にも在籍されていた御経験があり、国立・公立・私立の他大学医学部の御事情をよく御存じでした。私にも他大学のやり方を覚道先生から教えていただき、「なるほど、そういう仕方もあるのか。」と思いながらお話を伺ったものです。1つの大学しか経験したことがない時は「そのやり方がすべてだ」と思ったり、自分の母校と次の大学

しか経験がない時は「(次の大学で良くないことがあった時)自分の母校の方がすべて良い」と思いがちです。しかし、覚道先生は国公立の多くの大学を経験されており、他大学の良いこと悪いことも含めよく御存じでした。覚道先生は時には本学のことを激しく非難されることもあり、本学出身でない私が「そこまで言われなくとも」と思ったこともありましたが、これは覚道先生の母校愛からの言葉だったと思います。

覚道先生の教室運営で感心していたことは、覚道先生の教室から出版される論文の多さです。私が赴任してきた2000年から10年間で本学の活動報告書から調べてみますと、英文原著の数は、2000年13編、2001年15編、2002年29編、2003年22編、2004年15編、2005年20編、2006年16編、2007年10編、2008年6編、2009年8編です。特に2002年は、英文総説も含むと37編の英文論文が出版されています。2002年は、10日に1編英文論文が出版されている計算になります。大きな臨床の教室ではこの数はさほど不思議ではないかもしれませんが、地方にある基礎医学の教室から出版される英文論文の数と考えれば、これは驚異的な数です。多分2008年だったと思いますが、覚道先生が「今年は英文論文の数が2桁いかなかった」と少し悔しそうに言っておられたのを覚えています。

最近ですが、覚道先生から図書館に多額の寄付をいただきました。覚道先生は図書館長を以前されておられたこともあり、図書館の窮状をよく御存じだからだと思います。主に学生用の教科書を中心に買わせていただこうと思っています。私、現在の図書館長として心から感謝したいと思います。どうもありがとうございました。

覚道先生は、次の職場でまた重要なお役目があるとお聞きしておりますが、健康に気をつけられ益々御発展されることをお祈りいたします。今まで本当にどうもありがとうございました。

覚道先生、6年間有難うございました

第一病理学教室 村垣泰光

2005年6月に私が教授就任して以来約6年間にわたり、覚道先生は病理学の先輩教授として私を指導してくださいました。その一つとして最も印象に残っているのは2006年11月の和歌山で主催された日本病理学会秋期大会で私を副会長にしてくださいましたことです。まだ教授になったばかりで学会内でどうふるまったらいいかわからない私を丁寧に指導してくださいました先生の懐の深さに感銘を受けました。現在日本病理学会の理事として覚道先生が活躍されていることは和歌山医大病理学教室の教員として誇りと感じるところであります。日常の病理業務、教育および研究においても覚道先生は私たちに多くの事を教えてくださいました。覚道先生ご自身は在職中に研究、教育、その他で先生が目標とされていた事柄を全てやり遂げられ、大きな達成感を感じておられることでしょうか。多くの面でご指導とご鞭撻を頂いていた覚道先生がご退職されることは私共第一病理学教室にとって、いや和歌山医大にとっても大きな損失であると思います。この大きな損失を補填すべく我々は多大な努力をしていかないといけないという重圧を感じております。覚道先生、6年間本当にお世話になりました。今後の益々のご活躍を期待しております。

気一徹

和歌山県立医科大学血液内科 教授 中熊秀喜

信念の人である。8年ほど近くでお付き合いいただき受けた覚道健一教授の印象である。そのお人柄が先生の教育や研究、運営面などでも発揮され、夥しいほどの論文や人材などの実績を世に広く送り出してきており、敬意を表する。たぶん、今後はこのような古武士を彷彿させる教授はなかなか現れないであろう。私も先生の精神の一分でも見習い少しでも多く方にお役

に立ちたいと志を新たにしているこの頃です。教育とは周りに心に響く余韻を残し、やる気にさせることだと先人から聞きますが、まさに覚道先生の教授人生そのものです。少し早いご退官で我々には心残りですが、続く人生が楽しく充実したものでありますように、また先生のご健勝を祈念いたします。お世話になりました。

『覚道先生、御指導ありがとうございました』

和歌山県立医科大学産科婦人科講座 井 籠 一 彦

覚道教授、この度のご退職おめでとうございます。

私が和歌山県立医大の産婦人科教室で仕事をするようになったのは、平成22年4月からであり、覚道先生には1年間という短い期間でしたが、いろいろな面で御指導を賜りありがとうございました。

産婦人科の日常臨床において、婦人科腫瘍の病理診断は必須で、病理学教室との関係は切っても切れないものであります。就任後、すぐに、先生のご尽力もあり、月1回の定期的な婦人科-第2病理-放射線科の3科合同症例カンファレンスが再開でき産婦人科の若手医師の教育にたいへん寄与しているだけでなく、私自身も毎回勉強させていただいております。

また、昨年11月の第49回日本臨床細胞学会秋期大会は、先生の卓越したリーダーシップとご人徳、教室スタッフのご努力により大成功、大盛況にて終了いたしました。実は私は、こちらへ赴任する前、名古屋にいる時に先生から直接連絡をいただき、大会副会長就任を打診され、そのときは熟慮する余裕もなく受けてしまいましたが、その責務の重大さに後で気づいた次第で有りました。本学会に際して、私は名ばかりで本当に何も貢献できず、先生及び人体病理学教室の先生方にはご迷惑をおかけしました。

今後の、覚道先生の益々のご研究の発展と御健康を祈念いたします。これからも産婦人科教室への御指導も宜しくお願いいたします。

退官に寄せて

和歌山県立医科大学法医学教室 近 藤 稔 和

平成15年4月に私がこの和歌山県立医科大学に着任して以来、病理学と法医学という関係もあって、この8年間覚道先生には本当にお世話になりました。特に、法医剖検後の病理組織検査において、わからないことや判断に迷ったときなど、先生のご都合も伺わず、プレパラートを持参しても、いつも笑顔で迎えてくださり、懇切・丁寧に病理組織を観察していただきました。このようによくしていただいたにもかかわらず、先生が学生部長となられたときに、学生部委員のお誘いを、教室運営を理由に断ってしまったこと、「若気の至り」とでも言いましょうか、今となっては失礼極まりない行動であったこと深く反省しております。しかしながら、その後も覚道先生は、こんな生意気な若造に温かく接して下さり、昨年11月に先生が会長として、神戸で開催された第49回臨床細胞学会秋期大会では、特別講演という身に余る機会まで頂くなど、先生に対して感謝の念が絶えません。最後になりましたが、この度、先生が定年を待たずしてこの和歌山医大をご退職されることは、私のみならず和歌山医大にとっても大きな痛手であることは言うまでもありませんが、4月からの新天地での益々のご活躍を祈念申し上げます。

覚道教授退職記念業績集発刊を祝して

和歌山県立医科大学医学部同窓会 会長 吉村利規

このたび、無事にご退職を迎えられ、おめでとうございます。

覚道先生は、私と同じ昭和48年卒で、卒業後すぐに、大阪大学医学部大学院へ進まれ、基礎一筋に研鑽をつまれ、兵庫医科大学、東海大学を経て、平成2年に本学第2病理学教授に就任されました。

本学出身の教授は、それまでも本学生え抜きで、学内から教授になられた方はおられましたが、他大学で修練をつまれ、その成果をもって本学の教授となられ、研究、教育に尽力され、本学の発展に寄与されているのは、覚道先生がその嚆矢となり、その後臨床にも、同様の教授が誕生しております。

まだ、定年まで数年を残していますが、細胞診の分野の人材育成を次の目標と定め、時機を得て、本学を退職するにあたり、健康に留意されて、今後のますますのご活躍をご祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます。

覚道健一君の学生時代の思い出

公立大学法人和歌山県立医科大学神経内科 近藤智善

覚道健一君（学生時代の思い出なので「君」づけで呼ばせて頂きます）と私とは、アイウエオ順で苗字が近いので、基礎実習や臨床実習、さらには国家試験の時でも、グループ編成となるときには、同じグループかとなりのグループになることが常であった。また、入学して間もない頃にはサッカー部や男性合唱の同好会に顔を出したり、スキー部の主催する講習会に一緒に参加したことがある。そのようなもろもろの思い出の中で、覚道君を語るには、外せない二つの思い出がある。

彼が、学部4年（1970年）のとき、和歌山医科大学探検部として、宮西照夫君（現和歌山大学教授）を中心に「探検の企画」に応募したのである。毎日新聞和歌山支局の後援を得て、ユカタン半島の原始林に分け入り「マヤ文明」の末裔の原住民を対象に血液型の検査を行ったところ、集落全員がO型であったという結果を発表し、驚かされた。また同時に遠い彼らの祖先（古モンゴロイド）が2万年前に辿ったであろう道に思いを馳せた記憶がある。探検の道中、探検途中の原始林の中でガイドが道に迷い、遭難しかかったというエピソードも後日聞いた。

2つ目のエピソードは、国家試験のときの思い出である。当時は口頭試問があり、私たちの試験ブースでは、胸部単純レントゲン写真の読影（異物による気管支閉塞に伴う無気肺）、血液プレパラートの検鏡（好酸球）、胃粘膜生検の検鏡拡大写真（ポリープと早期胃がんのクラスIIc）がスライドで出題された。試験場を退出したあと、お互いに「あれは何だった」などとコメントし合う中、彼の「プラスチックの鉛筆キャップなんて、（写ってないから）縦隔変位を俺は全く気がつかなかった」という嘆息の声が聞こえてきた。

以上は、覚道君が紅顔の美青年時代のエピソードであるが、その後、大阪大学の大学院に進み、星霜を経て、母校、和歌山医大の第二病理学の教授となった。うえのエピソードは彼の忍耐力や研究に取り組む際のエネルギーのもとを示しているように思えるのである。

最後に1999年、私が和歌山医大に赴任して来て以来、親身にお世話していただいたことに心から謝意を述べ、稿を終えたい。



第52回日本病理学会秋期大会





病理学会教育委員会の皆様と



秋本教授送別会

覚道健一先生のご退官によせて

日本病理学会前理事長
日本臨床細胞学会理事長
東海大学名誉教授
国際医療福祉大学教授 病理診断センター長
長 村 義 之

ご無事に教授職を全うされてのご退任誠におめでとうございます。これまで長い間いろいろな局面で一緒にお仕事をさせていただいた1人として、心よりお祝い申し上げます。

先生は、母校和歌山医大の教授としてこれまで診療、教育、研究にとご尽力されてこられました。対外的には、第52回日本病理学会秋期特別大会および第49回日本臨床細胞学会秋期大会の会長として素晴らしい学会を主催されました。いずれの学会も、サイエンスのみならず広く趣向をこらし非常に意義深い学会として記憶に残っています。

覚道先生とは、東海大学医学部病理学教室において1985年より1990年まで真の意味で机をならべて研鑽いたしました。常に湧出るアイデアとその実行力に敬服していたのを覚えています。

先生は特に教育熱心で、学生および研修医には親身に接しておられ若手よりたいへん慕われております。覚道先生のその人材育成への情熱を学会活動の中では、教育委員会委員長（日本病理学会）、専門医委員会委員長（日本臨床細胞学会）として遺憾なく発揮されました。日本病理学会では、ホームページに掲載されている病理コア画像の充実に腐心され、その画像は病理教育に用いられるばかりでなく、日本病理学会以外からも多数アクセスされるのが現状です。

病理診断・研究では幅広い領域に興味を持っていますが、特に甲状腺癌の病理に長年にわたり取り組まれ、数多くの質の高いご発表により国内外から高く評価されています。

このように多方面へ多大な足跡を残された覚道先生の退官は大変寂しく存じます。先生のたくいまれなる才覚はまだまだ多くの方々が必要としています。今後とも健康に留意され病理学・臨床細胞学に的確なご指導をいただきますよう祈念しております。

覚道健一先生このたびは誠におめでとうございます。

若き日の覚道先生の思いで

医療法人神甲会 隈病院 院長 宮 内 昭

覚道教授退任前の晴れ舞台、第49回日本臨床細胞学会秋季大会会長招宴で来賓の一人としてスピーチを依頼された。外科医である私がと怪訝に思った人もいたであろう。私は、大阪大学を卒業、大学病院と吹田市民病院での研修の後、もう少し勉強したいと阪大第二外科に戻った。当時の陣内教授との面談で内分泌外科と病理に興味があると言ったところ、第一病理（宮地教授）の下で勉強するように指示され、学内留学の格好で約2年半病理の勉強をした。このとき、私と向かい合わせの机にいたのが大学院に入ったばかりの覚道先生であった。ホルマリン臭い病理解剖室のすぐ近くのこの若者部屋には片山先生、花田先生、石黒先生もおられた。私の外科での指導医である高井新一郎先生（後の阪大腫瘍外科教授）の影響もあり、私は甲状腺髄様癌や多発性内分泌腫瘍症に興味を持ち始めた。バイト先として紹介された甲状腺専門病院である隈病院の病理組織標本を見直し、髄様癌のプレパラートを持ち帰り、しばしば覚道先生や片山先生とディスカッションした。そのうち、覚道先生が、顕微鏡を覗きながら、「髄様癌って美しいね」と言い出したのには、恋人を取られるような危うさを感じたものである。これが、覚道先生が内分泌病理に興味を持ち始めた切掛けの一つであろう。もう一つの思いでは、髄様癌についてある程度まとめた頃に、「私のような若輩が論文を書くのは・・・」とためらいの言葉を口にしたとき、覚道先生に「偉い先生が論文を書くのではなく、論文を書いた人が偉くなるのですよ」と諭されたことである。まさしくそのとおりであった。覚道先生はその後、大いに研鑽され、たくさんの論文を発表し、内分泌病理の大家になられた。私はその切掛けを作ったのかも知れない。ともあれ、その後、覚道先生とは色々と共同研究を続けてきた。教授退任後も今まで同様にご活躍されることと期待している。

和歌山県立医科大学第二病理学教室教授職卒業おめでとうございます。

大阪市立大学大学院医学研究科 診断病理学(病理部)教授 若狭研一

覚道先生が和歌山県立医科大学第二病理学教室教授を退官されるということで、残念に思いますが、覚道先生にとっては和歌山県立医科大学第二病理学教室教授という立場でやるべき事はすべてしたという判断をされたのだらうと存じます。これからは神戸常盤大学という新しい場で活躍する設計図は既にできているに違いありません。

私は覚道先生とは昭和56年に大阪大学の病院病理部に入って以来の付き合いです。私は内科で回り道をしており、この時には既に覚道先生は兵庫医科大学病理に移られた後でした。でも時々大阪大学に来られては、その都度、新しい英文の論文の別刷りを頂きました。これは病理の駆け出しの私にとってはいい刺激になりました。その後も覚道先生とは遠からず近からずのところにおいて、仲良くして頂きましたし、何かと御指導頂きました。

自他共に認めることですが、覚道先生はアイデアマンで、しかも決断が速い人です。第49回日本臨床細胞学会秋期大会ではハンドアウト集を学会プログラムと一緒にして印刷する等、これまでの学会と違ったスタイルを作られました。しかも非常に充実した内容でした。細胞学会に先立って、平成18年に和歌山において第52回日本病理学会秋期特別総会をされた時も、一会場であった秋期特別総会を複数の会場にし、会員によるコンサートをひらく等等、これまでなかったことをされました。

私は覚道先生の後を受けて、日本臨床細胞学会近畿連合会会長を平成22年4月より拝命しております。覚道先生は平成18年より2期4年にわたって近畿連合会会長をして頂きました。覚道先生の後にはなかなか荷が重いのですが、ひきつづき御助言も頂きながら、近畿の細胞診を盛り上げていくようにしたいと思っております。

覚道先生には和歌山県立医科大学第二病理学教室教授職卒業おめでとうございますと申し上げたいと思います。同時に神戸常盤大学という新しい場での御活躍を祈念いたしております。

覚道先生一学生時代からの大先輩

兵庫医科大学 遺伝学 玉置知子

覚道先生は、学生時代には私の2年上の「大」先輩でしたので、気安くお話できる方ではおられませんでした。私が卒後しばらくして兵庫医大に勉強に移ったところ、病理の覚道先生をはじめ、産婦人科と内科に和歌山医大の同年の先輩がおられると伺って心強く思うとともに、「シニアの先生」として御挨拶をするだけでした。しかし当時の私の指導教授は「とても元気で独創的な意見をもっておられる」と高く評価されていました。その後先生は東海大にご栄転され、また私が遺伝学講座のスタッフとなったこともあり、産婦人科の辻先輩とはお仕事を一緒にする機会に恵まれましたが、覚道先生についてはお噂を聞くにとどまっておりました。その後覚道先生も教授にご就任になって母校に帰ってこられ、私も非常勤講師をさせて頂く機会があり、お目にかかせて頂くことができました。私も、学生時代には病理学に大変興味があったのですが、何年かぶりに病理学の教室に入らせていただき、学生時代の厳しい先生方の思い出からかなり緊張しました。しかし覚道先生は、病理と分子遺伝学を融合したプロジェクトはどうか、とフランクにお尋ねくださり、とてもほっとしたのを記憶しております。私が腫瘍の分子遺伝学をてがけていたこともあり、覚道先生からは中村美砂先生をご紹介いただきました。中村先生は大変理解が早くまた実験の手際も美しい先生で、新しいスプライシングバリエーションを見つけるなどをご一緒することができました。また覚道先生は私どもが兵庫医大で行っている遺伝子診断や出生前診断にも興味を持って下さり、いろいろなサジェスションも下さいました。

2009年には、2010年には、御自身が大きな日本細胞学会を神戸で主催する、というお話をさ

れました。規模は何と3000人の参加者がある巨大会とのこと、たいへん楽しみにして、2010年11月には参加させていただきました。人類遺伝関係の学会がこじんまりしているのと対照的に、全貌が見渡せないくらい大きな学会でしたが、それぞれのセッションがたいへんよくまとまったもので、改めて病理学分野の底力を感じました。とともに、これだけ大きな学会を、学問的には十分な実がありかつ楽しい趣向をこらして運営なさる覚道先生の実力に、あらためて感銘を受けました。

覚道先生は2011年春には和歌山医大から神戸常盤大学に移られると伺いました。私の身勝手ではありますが、私どもの近くに来て下さることになり、私どもにとってはたいへん幸いなことです。私どもとの交流も密にさせていただき、新しいプロジェクトを立ち上げることができるよう、お待ちしております。今後とも先輩として御指導をお願いいたします。

鉄の男 覚道さん

山形大学医学部人体病理学 本 山 悌 一

同じく昭和48年に大学を卒業した覚道さんが定年を前に和歌山医大を退かれ、次の人生を歩もうとされている。これも何事にも優柔不断の我がことを思うと、格好良く輝かしいばかりの振る舞いに見える。客観的にみるならば、覚道さんは毀誉褒貶相半ばする人物と言えそうだ。私は、自分の不足している部分はそれについて優秀な他の人に補ってもらえばよいという考えなので、内分泌病理に関する山形大学の学生講義や甲状腺細胞診の山形県における勉強などのために覚道さんにはお世話になった。そういった機会を通して、同年代という気安さからか、時にふと弱音を漏らされる姿にも接していたので、強引さを感じることは私には全くなかった。陽でない評価もあったのは、覚道さんに人一倍意志の強さがあり、人一倍実行力があつたことの裏返しであろう。鉄の女サッチャーと同じ宿命にあつたのである。その鉄の男が、熱いことはあつても決して冷たくはなく、むしろ周囲で一緒に働く人に対しては濃やかな心遣いをしていただろうことは、何度か招いていただいた和歌山医大の教室を訪れるたびに感じられたし、主催された学術集会でも感じられた。自分の信じるところを進もうとする覚道さんの強さと熱さと優しさ私も持ちたいと思う。

覚道健一先生との16年

鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 腫瘍学講座 人体がん病理学 米 澤 傑

覚道健一先生が、私に初めてお声をおかけくださいましたのは、1994年にハワイのラハイナで開催されました第4回日米合同組織細胞化学会に参ります折、その当時の大阪伊丹空港の国際線の待合室でした。覚道先生がお声をかけてくださいました瞬間が、今でも待合室の情景と共に鮮やかに蘇ってきます。学会では、もちろん沢山の勉強もいたしましたが、学会後、故・渡辺慶一教授のご還暦のお祝いのディナークルーズに、渡辺教授がクラシック音楽愛好家でいらした関係かと思いますが、私もお誘いをいただき、船上でお祝いにカンツォーネを歌いました。その時の船上での覚道先生のお姿もよく覚えております。

それから16年後、覚道先生が会長をお務めになった2010年秋の「第49回日本臨床細胞学会秋期大会」におきまして、11月20日の夜には会長招宴にて家内ともども沢山のお客様の前で歌わせていただき、11月22日の朝には「ムチン：ヒト癌における臨床病理学的意義 遺伝子発現機構、早期診断システムへの応用」という特別講演をさせていただき、私にとりまして一生の記念となる「公演と講演」ダブルヘッダーの実現を、覚道先生がお許しくださいましたことに心より深く感謝申し上げます。

会長招宴では、宴たけなわの時間帯に歌うことになっていましたので、最初から高い輝かしい声で始まるトスカの「たえなる調和」を一番最初の曲に持ってきてお客様の注意を引く工夫をし、その長い前奏を逆利用して、まずはピアニストのみにスポットライトがあたり、前奏の途中で客席の明かりが徐々に落ち、対照的にステージが明るくなると、私が登壇して歌い始めるという「作戦」が見事に当り、それまで談笑ではずんでいた会場が、私の第一声とともに一斉にステージにご注目くださり、ブラボーまで交えた拍手喝采をいただきました瞬間の快感も生涯忘れ得ません。

覚道先生との16年は、私がお世話になるばかりの16年でした。衷心よりの御礼を申し上げますと共に、覚道先生の今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

学究肌の人

山梨大学医学部人体病理学講座 加藤 良平

覚道先生と出会ったのは、今から25年も前で、先生がまだ東海大学に在籍していた頃です。当時は、まだ若くて（当たり前）新進気鋭の内分秘病理学者として注目される存在でした。先生はいわゆる学究肌で、学問的に筋が通らないことに関しては、厳しい意見をいつも述べておられました。その姿勢は、真理を追究する研究者としては当たり前の姿ですが、当時の馴れ合い的な学会発表の場においては、とても新鮮で清冽な印象を受けたものです。思い起こすと、私との会話の中で「研究者は論文だよ。僕は英文原著論文を年の数だけ書くよ」と仰っていたのを今でも覚えています。軟弱な私は、先生のそんな姿勢や言葉にとっても多くの刺激を受けました。案の定、その後すぐに和歌山医科大学の病理学教室の教授になられて、モチベーションを絶やすことなく研究生活を続けられ、数々の素晴らしい業績をあげてこられたのは、ご同慶の至りに存じます。

そんな先生も参加されて結成されたのが「サイロイドクラブ」です。このサイロイドクラブには、日本全国から甲状腺の病理に興味を持つ病理医が参集し、その集会では毎回、熱い議論が交わされました。すなわち、現在の日本の甲状腺外科病理学は、このサイロイドクラブが核になって発展してきたものと思われます（少し自惚れている）。そのサイロイドクラブの中心的存在として活躍されてきた先生が、今回転出されることになったのは、御めでたい事である反面、同じ道の研究者としては少し残念にも感じる次第です。

覚道先生はこれまで研究だけでなく、多くの学会に貢献し、学際的な場をひたすら走り続けてきたように思います。これから新しい道に入っても、持ち前の研究心とバイタリティで必ずや素晴らしい世界を築かれると確信いたしています。

謹んで、これまでのご厚情に感謝するとともに、これからのご発展とご健康を心から祈念いたします。有難う御座いました。

覚道先生との出会い

仙台市立病院 病理診断科 長沼 廣

私が仙台市立病院に赴任した翌年の1991年に突然サイロイドクラブから入会の案内が来ました。仙台で開催される第24回甲状腺外科研究会の前日に開催される会と聞かされました。初めて聞く会の名前で、何をやる会かも分かりませんでした。何故、急に入会？と思いましたが、要するに仙台で開催する会の世話をしてほしいとのことでした。覚道先生とはこのとき初めてお目にかかりました。先生との長いお付き合いのスタートでした。

当時、仙台市立病院には甲状腺外科的場先生、婦人科腫瘍の東岩井先生がいらっしゃいま

した。甲状腺病理と婦人科病理のどちらを専門とするか迷っていましたが、サイロイドクラブに入会したことでほぼ自動的に甲状腺病理への道へ踏み込むこととなりました。現在までの長い間覚道先生や諸先生に指導していただき、今では東北地区で甲状腺病理医の看板を掲げさせていただいております。

覚道先生との出会いは思いもかけないところで始まり、年に1、2回のお付き合いですが、たくさんのお機会を与您いただき、現在の私の基礎を作ってくださいました。第49回日本臨床細胞学会では「病理外来」をテーマに要望講演をさせていただきます、大変感謝しております。今後もいろいろな意味で新しいチャンスを与您いただけるものと期待しております。今後のご活躍を祈念しております。

隈病院外科 伊藤 康 弘

私は2001年に隈病院へ外科医として入職し、甲状腺外科の勉強をほとんど一からはじめました。それと並行して、甲状腺癌における様々な遺伝子産物の発現に関する研究も行なうことに致しました。しかし、当時の隈病院は病理の常勤医がおらず、組織切片から自分で作成しなくてはならないような状況でありました。そういった中で、当時、非常勤で病理診断を担当しておられた覚道先生には、本当にお世話になりました。論文の執筆で行き詰まったり、査読者からの意見に対するコメントをどう書こうか困ったりしたときには、いつも覚道先生に助言をお願いしたものです。覚道先生はその都度、ご多忙であるにも拘らず、的確なアドバイスを下さり、私はそれにどれだけ助けられたかわかりません。昨年出版されたアメリカの教科書、「Endocrine Pathology」の髄様癌の項を分担執筆させていただいたことも、よい経験、よい思い出であります。このたび、和歌山医科大学を退官されるとのことですが、覚道先生のことです。新天地で新たな研究および教育活動を展開していかれると存じます。覚道先生、本当にお世話になりました。そしてまた、これからもよろしくお願ひいたします。

覚道先生へのお礼

日本臨床細胞学会和歌山県支部 副支部長 宮 木 康 夫

覚道先生、ご退官おめでとうございます。謹んでお祝い申し上げます。先生が1990年に和歌山にいられて約22年間の生活、いかがでしたか。辛かったこと！悲しかったこと！楽しかったこと！嬉しかったこと！ホントいろんなドラマがあったことと思います。その記憶の何十分の1あるいは何百分の1の中に、“日本臨床細胞学会和歌山県支部”の存在を残していただいているのであれば私としては本望です。バブル時代を含め厳しい時代背景の中、和歌山県の細胞診を引っ張っていただき、本当にありがとうございました。教育、養成、ボランティア(手弁当)、中国検診活動の橋渡し、そして最後に念願の日本臨床細胞学会の開催まで、さすがとしか言いようのない実績を重ねられ本当にお疲れ様でした。

昨年、第49回日本臨床細胞学会秋期大会という学会の運営をお手伝いさせていただき、そこから生まれ出たのが「感謝」という言葉でした。人生56年間の中で、この言葉が自然にわき上がってきたことは私にとっては何よりも嬉しく、また大きな宝物となりました。そして、どうか和歌山の「つれもていこら」精神を新しい職場で少しでもお役に立てていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、先生のご健勝と新しい職場での益々のご活躍を心から念じております。

(写真は覚道先生が和歌山県にいられた当時の物です)



覚道先生

徳島大学人体病理学名誉教授・日本内分泌病理学会前理事長 佐野 壽 昭

この度のご退任、心よりお慶び申し上げます。

先生には同じ内分泌病理学の分野で活動する研究者として、また、海を挟んで隣り合う大学の病理学教員として、長い間、親しくさせて頂きました。大学がまだお城の近くにある頃から、毎年、内分泌病理に関する講義を担当させて頂き、覚道先生にも何度も徳島に来校して頂き、長期にわたる大学間の相互交流が続いたことに心から感謝申し上げます。

覚道先生は精力的に数多くの学会を主催されましたが、私にはとりわけ和歌山市での病理学会の折の趣向に富んだ展示が印象に残っています。心和む一角に先生のお人柄を見た感じがしました。

先生はまた、日本病理学会はじめ各種学会役員としても活躍されました。日本内分泌病理学会ではおぼつかない小生を補佐して頂きました。国際的にも、米国での内分泌病理学会EPSの会長を務められ、シンポジウムを企画、講演され、立錫の余地のない盛況を博したことは慶賀に堪えない思い出です。

先生にはご退任後も内分泌病理学の分野での研究の益々のご発展とともに、日本の病理学の興隆のためにご活躍下さいますことを祈念申し上げます。

平成23年1月吉日

覚道先生ご退官に寄せて

兵庫医科大学 病院病理部 山本 格 士

覚道先生、

この度は、つつがなく退官を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

長年にわたるご研究や教鞭生活、本当にお疲れさまでした。

先生とのお付き合いはもう30年になりますね。「時の流れ」を痛感いたします。顧みるに、昭和55年11月、故植松邦夫教授が初代部長として開設された兵庫医科大学病院病理部に同時に着任したことが、覚道先生との運命的な出会いとなりました。当時講師でいらした先生が、いつも中心となって医局全体を引っ張っておられたように記憶しております。また病院病理部検査室へも、どんなに忙しい状況でも、時に厳しく、時に温かい眼差しをもってご指導くださったことを懐かしく思い出します。その後、昭和60年に東海大学医学部に赴任されることになり、5年という短い時間しか直接のご指導がいただけなかったにもかかわらず、そのバイタリティー溢れる先生のお姿は、今も大きな支えとなり今日に至っております。

私もこの3月に退職することになりますが、先生が学会長として開催されました第49回日本臨床細胞学会秋期大会（神戸市）において、優秀演題賞の荣誉に浴し、授与の機会を頂戴したことは、とてもよき思い出でになり、深く感謝の意を申し上げます。

引き続き私立大学で教鞭を執られるとのことですが、今後の先生の更なるご健康とご活躍を心より祈念いたします。

覚道先生へ

大阪労災病院 病理診断科部長・副院長 川 野 潔

覚道健一先生、退官おめでとうございます。定年前であるにもかかわらず、自分で決めて実行する覚道先生らしい退官の仕方ですね。

私が、先生にお会いしたのは、昭和52年7月、大阪大学第1病理学教室でした。先生はすでに大学院を修了していましたが、他に3人の和医大からの大学院生がおられ、和医大出身者が教室を席卷していました。暫くして、先生はアメリカに留学され、帰国後、兵庫医大に移られました。その後、先生の最初の留学先であるジョージア医科大学に、私が行くこととなり、出発前には留学のための心構えを教えてくださいました。ありがとうございました。

先生は、自分の意志のもとに、目標を定め、決断、実行するタイプで、日本病理学会、日本臨床細胞学会で実証済みですが、主催者となれば、ユニークで創造性に富んだ催し物を企画することができる人です。私は、どちらかという、人に頼まれて行動、実行するタイプで、先生とは真逆のように自分自身をとらえていました。しかし、期せずして、私も大阪労災病院を退職することとなりました。これは、私の意志によるものでしたが。

これからも自分の意志のもと進むべき道を切り拓いていってください。ご苦労様でした。

覚道健一教授退官記念文集寄稿文

大阪医大総合講座病理学 専門教授 辻 求

覚道健一先生、退官おめでとうございます。私は覚道先生の和歌山医大の4年後輩に当たります。先生は大阪大学第一病理学教室の宮地徹先生の門下生になりますが、私は第二病理の岡野錦弥先生のところに入門しました。大阪大学ではお目にかかったことはなかったのですが、先生が和歌山医大に教授として栄転され、私が高槻の大阪医科大学付属病院の病院病理部で診断に明け暮れ猫の手もかりたい時に、外科から移られた現尾崎敬講師を預らせてもらいました。尾崎先生は和歌山の南部出身で、田舎が近く、話がよくあいました。夜遅くまで診断していただき助かりました。以降、学会などで活躍される覚道先生の姿をお目にすることがありました。日本病理学会秋期大会やこの度の第49回日本臨床細胞学会秋期大会を主催され、中央から離れた和歌山の名前を全国に広めてくれたと思います。また、中国山東医科大学との交流でも大変功績があったと思います。一衣帯水の中国で、古くは多くのことを中国から学んだ日本ですが、現在の中国とどう向き合うのかを考えると、いつか覚道先生が撒かれた種が実を結ぶことなのでしょう。

日本臨床細胞学会和歌山県支部長 馬 淵 義 也

第49回日本臨床細胞学会秋期大会は大会会長 覚道健一教授によって、「教育・専門医研修と検査士養成」とした大会テーマのもとに、大会史上屈指の3800余名の出席者を得て、誠に盛会裡に終了されました。

流石覚道教授が生涯をかけたメインテーマの集大成で、参加された専門医、細胞検査士だけでなく、受験生を含めた皆様方は夫々の立場で、満足されて帰られたことと存じます。

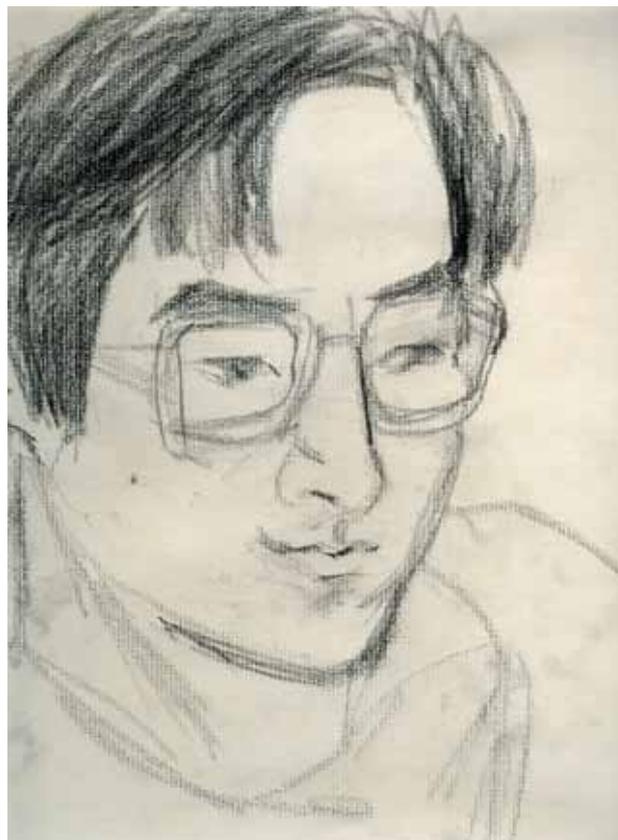
一方また、本大会の運営は学術集会は勿論、懇親会も全て、兵庫県をはじめ近畿2府4県の日本臨床細胞学会近畿連合会会員の手弁当によるご協力のもとに無事終えることが出来ました。和歌山県支部としても改めて御礼を申し上げます。

覚道教授は本年4月からは神戸常盤大学に於いて「細胞検査士の養成」に第二の教授人生の情熱を捧げられるかに聞いております。益々のご活躍とご発展をお祈り致すとともに、私共への今後のご指導も併せてお願い致しております。

覚道先生との御縁

大阪医科大学・看護学部教授 前 田 環

覚道先生とは「わからん会」(近畿地区の病理症例検討会)での私の初発表以来、30年近い付き合いになります。会主催の兵庫医大に当時、ご在籍だった先生から、新参者の私にわかりやすくアドバイス頂きましたことが懐かしく思い出されます。東海大学時代には免疫染色講習会で再会し、その後、私が森浩志教授の下で下垂体を扱うようになってからは病理学会や内分泌病理学会でご教授頂いてきました。最近では甲状腺細胞診について、臨床細胞学会でもご指導を仰いでいます。そして第49回秋期大会では座長に選んで頂き、貴重な経験を積むことができました。私が以前に在籍していた常盤短期大学(現・常盤大学)に、先生がいらっしゃることもご縁を感じます。常盤大学も臨床検査技師・細胞検査士の教育に、願ってもない人材を得ることができて心強いことと思います。覚道先生は、内容は厳しくとも優しい語り口が印象的です。これからもご指導を宜しくお願いします。



和歌山県立医科大学第2病理学教室
(大学院医学研究科人体病理学) 1990-2011年のスタッフ達



覚道先生との10年間

和歌山県立医科大学病理学2准教授 森 一 郎

覚道先生と初めてお会いしたのは東海大学に勤務していたころでした。私が先に助手でいたところに先生が講師で来られ、その後助教授を経て母校の和歌山医大に教授で戻られるまで一緒に同僚として勤務した仲になります。当時東海大では先生のことを「覚さん」と呼んでいました。そのため後に私が和歌山医大に助教授で呼んでいただいた時には、東海大の同僚たちから「覚さん」のところに助教授の「助さん」で行くのかと言われたことを覚えています。黄門様は不在でしたけれどネ。

本来教室員にとって教授は全く頭の上がない親分、ボスであるのが普通と思いますが、もと同僚であることや年齢があまり離れていないこともあって、私の中では先生は勝手に兄貴分のつもりでいます。弟分と決めてしまうとある意味気楽なもので、かなり勝手なことをさせてもらいました。先生が私にかなり気を使ってくれているのは良くわかりましたが、それにすっかり甘えていろいろご迷惑をおかけしたこともあったかと反省しています。

私は何事も無難にこなすことを目指してきたのですが先生はその正反対で、人と同じことはやりたくない、今までのやり方はできるだけ変えるという方針で、最初はとても驚きました。新しいことを絶えず試みるのですが、その際にあまり細かいことまでは指示せずに、大まかなことしか言わないことが多いのです。私が心配してあれはどうしよう、こうなったらどうしようといういろいろ言うと、先生は「これでいいんだよ」とおっしゃって、実際そのとおりに物事が流れていくのを不思議な気持ちで眺めていました。

細胞学会を主宰することが決まったときのことは忘れられません。その数年前に先生が細胞学会主催に向けていろいろ運動していたのは知っていました。それが何となく一段落して学会主催の話が流れそうなのかなと思っていたときに、先生が突然「細胞学会を主宰することが決まったよ」と言われたのです。まったく予想していなかった私は、一瞬「えーっ、やるんですか？」と言いそうになり、グッと、本当にグッとこらえました。こういう、何かをやるぞ！と言った時の「えーっ！」と言う反応は、言うほうは非常に簡単ですが言われたほうはとてもダメージが大きいものです。あれやこれやと頭の中を考えが駆け巡りながら、何とか口に寄せたのは「おめでとうございます」でした。それからあわてて教室に電話を入れ、「何を言ってもいいが、まずはおめでとうございますぞ」と指示を出したことが思い出されます。

先生が主催された病理学会と臨床細胞学会はその「人と同じことはやりたくない」面目躍如で、さまざまな新機軸を打ち出されました。事務局長を仰せつかっていた私はかなり戸惑いましたが、実際には先生がいろいろなアイデアを出しながら秘書の中峯さんと二人でどんどん先頭を突っ走り、私はただ必死についていただけでした。大変だったかといわれれば大変でしたが、このような学会を主宰する機会は望んで得られるものでもないし、本当に良い経験をさせていただきました。

まだいろいろと教えていただくこともあると思いますが、新しい場を得られて、今後のさらなるご活躍をお祈りいたします。本当に先生といると退屈はしないですみました。いろいろとありがとうございました。

覚道教授の退官を祝す

大阪河崎リハビリテーション大学 中 村 美 砂

今回の細胞学会の大成功とこれまでの覚道先生の御功績に対し深く敬意を表する次第でございます。

私と覚道先生とは随分長い間お付き合いをしていただいております、初めての出会いについても昨日のこのように鮮明に記憶しております。

当時、覚道先生が東海大学より、和歌山医科大学の第二病理学教室の教授として就任されて

間もなく、大学院生となり、覚道先生指導の下で博士号を取得し、それ以来カルシトニンの研究活動を続けております。

覚道先生は、皆さんもご存知のように昔も今も「齒に衣着せぬ」を地で行く方です。しかし、私の大学院受験の時、最後の番だった私の大学院試験の面接が終了し、6名くらいの面接官の先生方が退室される際、覚道先生は私に「皆さん忙しい時間を割いて、面接してくださったのだから、お礼を言いなさい」と言われました。この時、企業で働いていた私は、これも仕事ではないのかなあと生意気にも思いました。しかし、歳を追うごとにじんわりと、その時の覚道先生の言葉が浸み込んで参ります。覚道先生が言われることの、多くは正論(ではない時もありますが)で、あまりにもはっきりおっしゃるので覚道先生と初対面の学生さんたちは、ひゅっと身構えてしまいます。しかし、覚道先生の「形式にとらわれないこと」、「何でも楽しむこと」という教育の中で、留学生も含めた院生や学生さんたちは自分の可能性を広げることができたのだと思います。

私も、現在教育に携っています。ついつい、社会常識や学則が前歩きしがちですが、ぜひ覚道先生の人の育て方のノウハウを取り入れたいと思うこの頃です。

これからもますますお元気で御活躍されることを御祈念申し上げ、私のお祝いの言葉と致します。

覚道先生から学んだこと

和歌山県立医科大学病理学2講師 尾崎 敬

第49回日本臨床細胞学会秋期大会が無事終了しました。覚道先生、そして協力して頂いた多くの方々、御苦労さまでした。この学会が終わり、覚道先生は退職に向けての整理と、業績集の作成、今後の生活のセットアップに主な時間を取られることでしょう。

僕の知っている覚道先生は、いつも忙しそうでした。

日常の病理組織・細胞診断、解剖業務、医学生の教育は勿論のこととして、その他に医局運営・研究活動を維持するためのお金集め、業績作り、大学院生を修了させる責任、各種学会活動と、関連病院の維持など、本当に、ハードスケジュールをこなしていました。

覚道先生の口ぐせは『そんなん、すぐできるよ。』『やろうとおもえばなんでもできるよ。』でした。それは、今思うと、このハードな日常生活をやって、さらに複数の全国学会も開催したという自信から出る言葉だったのだなと思います。

今、大学に向かう電車の中で、覚道先生から学んだことは、自分をハードな環境において初めて自分の能力をさらに飛躍させることができるということです。

もちろん、できることと、できないことがあります。でも、深く考えることも大事だが、行動することがもっと重要だなと思うようになりました。目標達成の第一歩は、当たり前ですが、行動することです。

覚道先生の下にいて、学んだことは数多いですが、一番おおきかったのは、『なんだか、なんでもできそうな気がする』自信を身につけたことだと思います。

これは、今後、覚道先生が、和歌山医大を離れ、そして独り立ちしていく僕には、もっとも重要なことです。通常の病理診断・解剖業務は当然のこととして、さらに研究活動と教育もやれる能力が要求されます。この3つの要求がクリアできる能力を身につけるためには、絶えず努力し、自分の能力を高める必要があります。『なんだか、なんでもできそうな気がする』自信は、やはり、覚道先生に鍛えて頂いたことで、獲得した貴重な財産と思います。

覚道先生が和歌山を離れても、覚道先生の下で鍛えられた僕は大丈夫です。

「和歌山県立医科大学第二病理学教室の思い出」

和歌山県立医科大学病理学2助教 谷 口 恵美子

1993年6月21日から和歌山県立医科大学第二病理学教室（人体病理学教室）に働かせていただきました。早や18年近く過ぎようとしています。その頃病理の仕事からも細胞の仕事からもしばらく遠ざかっていた私でしたが、その日から突然、毎日毎日どっぴりと酒浸りならぬ、仕事浸りの日を送り、いつの間にか、今日になっていたという感じです。けれどその頃教室では細胞診断、病理標本作成、解剖介助はもちろんのこと、免疫染色やDNAの抽出、電顕など、新しい技術もどんどん進んでいました。浦島太郎のような私はとまどうばかりでしたが、覚道先生に次々と溢れるような勢いで仕事を頂き、身の丈に合わないと感じつつ過ごしてきた気がします。背伸びして背伸びして、つま先立ちではありませんが、今日まで働いて来る事が出来たのも覚道先生のご指導のお陰と深く感謝しています。

又、私が和歌山に来てから、覚道先生が開催された学術集会は、細胞学会のワークショップを始めとして、近畿連合会、和歌山県支部学術集会、細胞検査士教育セミナー、そして昨年（2005年）の第49回秋期大会、それに加えて、病理学会の細胞診講習会は二年続き、2006年には病理学会の秋期大会を和歌山でと、行事は尽きませんでした。その間には、准教授の森先生の和歌山悪性腫瘍研究会、和歌山県支部学術集会と、今思えば1年から2年に一度、集会を開催する側としてお手伝いをさせて頂いた事になります。たくさん貴重な経験をさせて頂きました。

又、教室には中国の留学生の方が18年間で計11名も来られたため、中国を2回訪問させて頂きました。1回目は青島、済南、北京、2回目は貴州、雲南省、広州と基礎配の学生さんとも一緒に楽しい旅でした。通訳して頂きながら、日本の細胞診について発表させて頂いたことなど、懐かしく思い出します。私にこのような機会を与えていただき、本当に感謝しています。

18年の間には検査室には新しい技師さんが細胞検査士を目指して研修生として就職してこられました。最初は私も人に教えるどころではありませんでしたが、まず教材標本を作るところからスタートし、勉強会に追われるようにしてスライドをつくりました。私の役割は、「細胞診ってこんな仕事なんよ」と入り口を示してあげることでしたが、あとは 覚道先生をはじめとして、森先生、尾崎先生のご指導と、叱咤激励のもと、10名の細胞検査士さんが誕生し、今、和歌山、兵庫、大阪と活躍しておられるのはうれしい限りです。

検査士や検査技師の働く職場にも色々とお色があると思います。技術だけを求められ、裏方に徹する職場、表に出て行く人が決まってしまっている職場、全員で外に向かってアピールできる職場など。そのような中で覚道先生には、技師にも早いうちから発表の機会を与えていただき、又、他の先生方からもご指導やアドバイスを頂いて、みんな貴重な経験を積むことが出来たと思います。

その他、芦原温泉、那智勝浦、最近ではボルネオ等への教室旅行、毎年検査室でのカレーパーティー、クリスマス会、春には和歌山城や紀三井寺でのお花見と仕事以外の楽しみもたくさんありました。その時その時の検査技師さんがいつも大活躍してくれました。

覚道先生、18年間ありがとうございました。そして覚道先生をはじめとして諸先生方、卒業して行かれた技師さん、秘書さん、皆さんのこれからのご活躍を心よりお祈り致します。

覚道先生の退官によせて

大阪赤十字病院 若狭朋子

覚道先生が退官なさるのが残念でなりません。

先生とご一緒できたのは18ヶ月と短い期間でした。これまで診断病理のみをやってきた私に、学会活動という新しい世界への道筋をつけていただきました。

日本病理学会の教育委員会、診療報酬委員会、そして日本臨床細胞学会では専門医会報編集委員にご推挙いただきました。

教育委員会ではコア画像の編集に参加させていただきました。私自身勉強になりましたし、病理学教育への覚道先生の熱意はさることながら、広島井内先生をはじめとしたエキスパートの先生方、そして熱意ある若い先生方と知り合えたことは私の宝です。

ここで、覚道先生の名誉のために一言付け加えさせてください。

覚道先生は、病理学会に対して、昭和56年に刊行され、そのまま改訂されていない、「病理技術マニュアル」の改訂を学会に図ったのですが、予算等々の問題で却下されました。

「病理技術マニュアル」の改訂は一般実地病理医、そしてこれから病理専門医を受験する若手医師の切実な要望ですのに……。 (これがないと、何を勉強したらよいかかわからない。逆に昭和56年当時の古いことを試験で答えないといけない。)

小さな話題であります。覚道先生の病理学の将来に対する高い見識を表すエピソードとしてぜひともここに記させていただきます。(覚道先生は面白くないですか?)

パワーとアイデアあふれる先生が和歌山を去ることは、和歌山県の大きな損失であります。きっと先生はこれを足がかりに今後100年単位のお仕事をなさるかと思えます。

新天地でも世界に向けがお仕事なさることと思えます。

これからも一緒にお仕事できますように、私も勉強します。

ありがとうございました。

覚道先生とともに歩んだ人生?

和歌山県立医科大学 機能性医薬食品探索講座 准教授 宇都宮 洋 才

覚道先生との出会いは、私が東海大学病理学教室の大学院生として指導教授の渡辺慶一教授より頂いた研究テーマが甲状腺髄様癌の研究であり、この研究の指導者が覚道健一先生であった。しかし、覚道先生はまもなく和歌山医大の教授で栄転され、この研究テーマは手を付けることはなく忘れていた。その後、大学院修了後に行く当てのない私を和歌山医大第2病理で拾ってくれたのが覚道先生であった。覚道先生の研究をお手伝いすることなく第2病理で1年を過ごし、これまた覚道先生の御尽力によりアメリカで3年間の長い留学経験をさせていただき、帰国後は再度和歌山医大第2病理に戻していただいた。その後学内の共同利用施設に配置転換になり、その際に覚道先生から以下の様な言葉を饒別にご頂いた。「君はひとりの研究室を持つことから、第2病理とは違う研究をしてはどうか? 覚道の研究はするべきではない。自分自身のテーマを考えてみよ。もし君が研究を続けられなくなった時には、また助けてあげるから」この言葉が私の研究の礎となり、現在の私の研究といたしております。

この文を書いていて再度認識しましたが、私は覚道先生の研究を全くお手伝いしたこともありません。残念ながら役に立ったこともありません。覚道先生には大変お世話になり感謝いたしております。

もう一つ、書かねばならないことがあります。臨床細胞学会細胞診専門医を目指し、日夜研鑽していた第2病理の研究生であった小泉智子と覚道先生御夫妻のご媒酌で結婚いたしました。公私ともに大変世話になっております。

このように覚道先生との出会いが私の人生の大きな転換点になりました。

これからも今まで以上によりしく願ひいたします。

覚道健一先生との思い出

医療法人 定生会 谷口病院 検査部 寒川 月久美

私が初めて覚道先生にお会いしたのは、1995年大阪府立成人病センター細胞診スクリーナー養成所にて、細胞診の勉強に明け暮れ、一次試験は合格したものの、二次試験にて木っ端微塵に砕け散り、成人病センターのN技師に勧められ、覚道先生の下へ打ちひしがれた気持ちのまま伺ったときでした。

当時の先生はまだ40代で、『教授』=『おじいさん』と勝手なイメージを抱いていた私は、若っ!と思いました。(今でもほとんどお変わらないですね)そして『うちでトレーニングすればきっと合格するよ』といて頂いたことを今でもよく覚えています。

第二病理で約1年間病理業務を教えて頂きながら、細胞診の修行をさせて頂きました。試験前、覚道先生より『落ちたら、逆さ貼り付けの刑に処す』と脅し?愛のムチ?を頂いたおかげ???で無事試験に合格できました。

その後現在の谷口病院へと移りましたが、十年以上にわたり、細胞診指導医として御指導頂いただけでなく、谷口病院の細胞診、病理診断を担って頂き、支えて下さったこと心より感謝致しております。ありがとうございました。

お世話になりました

大正製薬株式会社 安全性研究室 石井 愛子

覚道先生、ならびに二病の皆様には大変お世話になりました。まず、この場をお借りしまして、心よりお礼申し上げます。

私は平成13年4月~17年3月の間、博士課程でお世話になりました。企業でできない領域の研究をさせていただく形でしたので、3か月に2週間の出張を4年間続けたのですが、覚道先生はたまにしか来られない私を気遣ってくださり、お伺いしたときにはお忙しい中時間を割いてご指導くださいました。卒業にあたりましては多大なるご尽力を賜り、本当に感謝しております。

私事ですが、昨年長男を出産し、私も二人の子供の親となりました。当時、先生がいつもお子さんの話を嬉しそうにされていたことが、昨日のように思い出されます。

覚道先生が和医大を去られることはとてもさみしく思われますが、引き続き他大学で教鞭を執られるとのこと、先生の益々のご活躍を祈っております。

2009年度最優秀論文賞受賞

隈病院 樋口 観世子

第49回日本臨床細胞学会秋期大会、論文賞受賞記念講演にて、「このようなすばらしい賞をいただいて非常に恐縮いたしております。また学会長の覚道先生および座長の坂本先生に、このような発表の場を設けて頂きお礼を申し上げます。」そう壇上で話しながら私は、覚道先生にお世話になった日々を思い返しました。

2001年4月、私は覚道先生率いる和歌山医大第二病理学教室で働かせて頂くとともに、細胞検査士を目指すことになりました。学生時代、優秀ではなかった私ですが細胞検査士になることができたのは、日々の鏡検と毎週行われる勉強会のおかげですが、覚道先生からのプレッシャーも私にとって頑張る力になっていたと思います。“覚道先生のためにも合格しよう。頑張って勉強するぞ!”と。

先生には二病を卒業し隈病院に就職した後も、私の事を気にかけて頂きました。お会いする

たびに「最近、どうかね。」私はその言葉、二病の頃を思い出すようで結構好きでした。

2009年、覚道先生がおられる研究班に参加し書かせて頂いた「甲状腺低分化癌の細胞像」という論文が最優秀論文賞を頂きました。受賞記念講演を覚道先生が会長を務める学会で行うことができ、私が少しでも成長した姿を先生にお見せすることができたのは本当に光栄な事です。

こんな私を育てていただき、本当に感謝しています。これからもお世話になる事が多いと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。



覚道健一先生ご退任にあたって

近畿大学医学部細菌学教室 樋口 智紀

私は、平成14年3月に近畿大学大学院生物理工学研究科で修士号を取得後、その年の4月より覚道先生のもと、平成18年3月まで第二病理学教室で大学院生としてお世話になりました。覚道先生には、病理解剖のお手伝いや看護学校の非常勤講師など実践的かつ非常に効率的に自身が学習できる様々な“教材”を与えて下さったことで、医学に全くの素人だった私が今、医学部で研究者そして教育者として活動している礎を築いていただきました。

覚道先生のお人柄は、明るくそして溢れんばかりのバイタリティがある先生だと私はまず思い浮かびます。毎日、奈良県の自宅から和歌山医大まで通勤されているお姿は今でも私の記憶に新しく、当時はとても私の30歳年上とは思えませんでした。現在も学会場などでお見かけした際も、変わらず活発に行動されているお姿に、“さすがは覚道先生”と感じるとともに、当時のことが懐かしくも思います。また覚道先生は、私に厳しくそして優しく見守る、まるで父親のようにも接していただきました。第二病理学教室在籍時にご指導いただいた研究者としての姿勢や考え方は、私の原点ともいえるものであり、感謝の気持ちが絶えません。

この度、現職を退任されるとお聞きし、自身の故郷が無くなるような寂しい思いもありますが、いつまでも若々しく、新天地でもその非凡な行動力で益々ご活躍されることを心よりお祈り申し上げます。和歌山医大での長いお時間、本当にお疲れ様でした。

覚道先生、御退官おめでとうございます。

兵庫医科大学病院病理部 西上 圭子

第2病理に在籍していた約4年間もの間、多大なるご指導・ご鞭撻を賜りありがとうございました。

私にとって、覚道先生の下で過ごした時間は良き思い出というよりも、私の糧となっております。この教室で養われた考え方・技術、そして素晴らしい先生・先輩・後輩達との出会いなどがけがえのないものをたくさん得ることが出来ました。先生は本当にパワフルで、あらゆることに対し活発に活動され、ご人脈も広いので、数多くのご高名な先生方やご活躍されている方々の貴重なお話・ご活躍ぶりを間近で体感させていただくことができました。また、国内外の学会発表、そして学会や資格試験の準備・運営など、あまりできないような経験もすることができました。このような貴重な経験を通して、技師として活躍できる分野の可能性の広さを十二分に感じさせて下さいました。

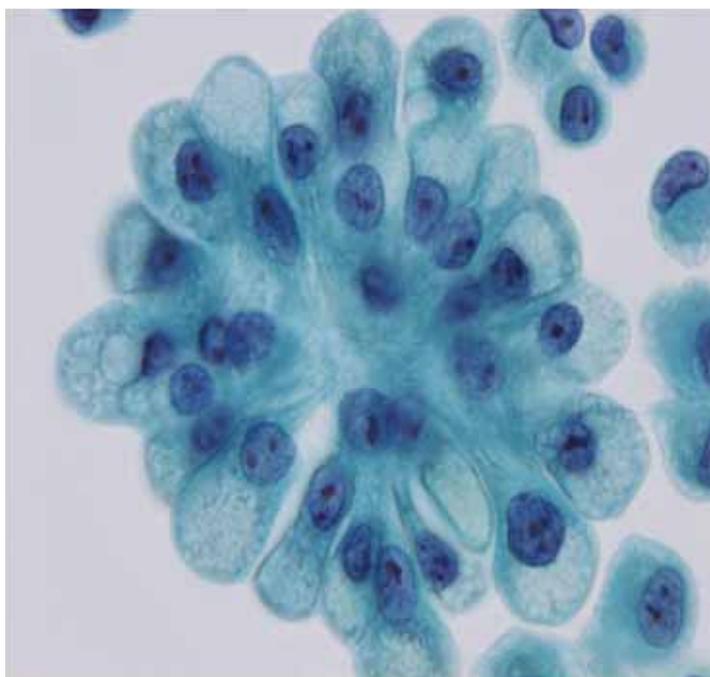
素晴らしい時間を与えてくださった覚道先生に心から感謝しております。

最後になりましたが、退官後ご活躍される場所は変わりましたが、今後のご健康とご発展をお祈り申し上げます。そして今後ともご指導いただけますよう、よろしくお願いいたします。

退官記念誌へ寄せて

神戸常盤大学保健科学部医療検査学科 布 引 治

長い間お疲れ様でした。医学の知識と研究に必要なスキルをご教授いただき感謝申し上げます。振り返りますと平成8年4月に研究生として籍を置かせていただくことになり、当時は和歌山城の隣にあった医大に大阪から南海電車に乗り週末に通っていました。勉強嫌いのごく平凡な技師であります私がなぜ研究に目を向けたのかと申しますと、さらに遡り平成6年(1994年)のことです。子宮内膜細胞診に関する論文を発表した際、どういうわけか故宮地徹大阪大学名誉教授から別刷請求が届き驚きました。宮地先生から御礼のお手紙をいただき、「もしかすると私に潜在能力があったりして」と誇大妄想と思いながらも研究の面白さに気づき、この先10年の計をたて大学院を探すことを始めました。ここで覚道先生との出会いがなければ誇大妄想で終わっていたと思います。覚道先生のお人柄、教育への熱意に心を打たれ、また第2病理の素晴らしい先生方に学ぶことが楽しく、当初6年の研究期間が終わる頃、思い切って大学院に入学し社会人院生としてさらに研究に励むことにしました。学位取得、さらに現在までの15年間ずっとお世話になりっぱなしです。私は現在、大学で教育、研究の仕事に携わっていますが、和歌山医大での経験がなければ今の私はなかったと思います。これまでのご指導ご鞭撻に感謝申し上げます次第です。有り難うございました。



池澤剛、腹水腎細胞癌（最優秀写真賞）

Dear Professor Kakudo:

January 10, 2011

First of all, please accept my warmest congratulations on your retirement. Now you have the opportunity to discover the beauty of the world and to do whatever you wish. As I am sure you know, it is sometimes difficult to find the right words to express a thought, but I can confidently say that you have enjoyed a long and productive career that you can justly be proud of and that your contributions as Chairman of the Second Department of Pathology are greatly appreciated by everyone in the Department. We will never forget the things you did for us. One day, I would like to be remembered that way also.

About twenty years ago, I joined your Department. Words cannot express my gratitude, as it was you who went beyond your responsibilities to find me mentors for Japanese lessons; it was you who spent hours explaining pathology to me; and it was you who encouraged me to be your PhD student and supported me through the four years graduate life. It was also under your supervision that I had been rewarded the Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science, and the Grant-in-Aid for Young Scientists by the Ministry of Education, Science, Sports and Culture. Yet, even these things are just trivial. What truly inspires us is the tremendous effort you had made for the progress of the Department and for the career success of everyone in this community. You have certainly demonstrated yourself as a great mentor and leader in developing the Department as a significant component of the Wakayama Medical University. Of course, I will also never forget your role in forging the friendship between Shandong University of China and Wakayama Medical University of Japan. Thanks to your contribution, a bridge was built for students and young investigators from the two universities to visit each other and to learn from each other.

I enjoyed working with you and I will miss you and your Department. Please remember that even though you have just retired from the Department, you have not retired from the heart of the Department community. Retirement is not the end, but a new beginning to life. I wish you a happy retirement life, a life full of joy and happiness with your family. Congratulations again.

Sincerely,

Liang Shan, MD, PhD
Scientific Imaging Editor
National Institutes of Health
Bethesda, MD, USA

A Message from Xiaojuan Wang

I had a wonderful experience studying as a Ph. D student at the Department of Pathology of Wakayama Medical University in Japan from 1999-2004 under the supervision of Professor Kakudo Kennichi. The experience has become a treasured one in my life. I am grateful for Prof. Kakudo, Wakayama Medical University, and the kind and supportive people in my community. The experience made Japan my second hometown.

Prof. Kakudo's selected me as a Ph. D. student after an interview during his visit to

Shandong Medical University (now the Shandong University School of Medicine). Since I first stepped into the laboratory of Dept. of Pathology in July, 1999 I was always surrounded by a true research atmosphere and compassionate peers whom I have been missing very much. In my eyes, Prof. Kakudo's department is a place that nourishes scientists and inspires people to face any difficulties in their lives. It is also a place full of a culture that makes you enjoy your life to the fullest.

It was amazing that everybody in his department was so focused on researching and publishing his/her data. As a supervisor, Prof. Kakudo always encouraged us to handle everything related to our career independently, including researching, teaching students, doing surgical pathological diagnosis, and various technical tasks related to pathology and histology. I really appreciated that Prof. Kakudo let me revise my first English paper five times: that was a tough but great lesson. I have truly benefited from all of his instructions very much since then.

The unforgettable moments seem like they are from yesterday. When I first joined the lab, Prof. Kakudo heard that I love singing and music. He went to his house immediately and brought back a CD player for me. It was such a big comfort for a newcomer like me, who had come to a foreign country with all the loneliness and language obstacles. To help improve my Japanese, Prof. Kakudo invited a former school teacher, Hiroko Hata, to come to the university and teach me regularly during the first few months. My daughter, Sherry, came to Japan one year after me and she wanted to keep learning piano in Japan. So Prof. Kakudo contacted the international exchange association in Wakayama and discussed our situation. A kind volunteer named Chieko Mukai generously lent her piano to my daughter for three years. In addition to encouraging us to work hard on research, Prof. Kakudo also encouraged us to speak more in Japanese with Japanese and get familiar with common Japanese and Japanese culture. He always encouraged me to sing in front of audiences, including sing Japanese songs as a way to learn the language. Thanks to all Prof. Kakudo's instructions and encouragement, I published eleven papers during the five years when I studied in his department; I became familiar with many Japanese songs (including Enka) and even became able to sing a lot of them; my family made a lot of Japanese friends and experienced a very good life with all my Japanese neighbors; and I enjoyed many beautiful places in Japan, like Osaka, Sirahama, Kobe, Kyoto, Tokyo, Nagoya, Niigata, and Yokohama. All these scientific adventures and extraordinary experiences have become my life time treasures.

Xiaojuan Wang, MD, PhD, Department of Medicine, Duke University Medical Center, USA

Dear Professor Kakudo

Congratulations to the retirement of Professor Kakudo!

Never have I imagined that the moment of his retirement will be coming so early and I am even not ready to say congratulations. In my mind, Dr. Kakudo, who once was the youngest professor in Wakayama Medical University, is always so young and full of energy. I was so lucky and honored to be accepted as a Ph.D student and to be instructed by him in the Department of Pathology of Wakayama Medical University in 1998, and then to work in the department as a postdoctoral researcher in 2003 after obtaining my Ph.D degree.

Dr. Kakudo is a wonderful supervisor and tutor. He helped me understand deeply the

significance of morphological and molecular research in the clinicopathological area of neoplasms, especially in thyroid pathology. I vividly remember the scene where we sat at one microscope face to face to review slides of thyroid cancers in Kumo Hospital. Thanks to his instruction, I could make my stay in Wakayama the most impressive, achievable and creative time of my scientific career. His many foresighted advices are still ringing in my ears.

He is not only a sagacious instructor in science, but also he treats his students in the same way as an affable father would do his children. He took seriously his responsibility in concerning his student's daily life, such as living condition, transportation and the education of their children. I really appreciate that he helped me to rent a house before my family came to Japan, gave us furniture, clothes, cookers and many other necessities that made our lives easy and convenient. The happy times that we spent in Wakayama have become never-fading memories in my mind.

I truly wish and also believe that the retirement would just open another door of life for Dr.Kakudo. This could make him enjoy his life more and he could spend more time with his lovely wife and children.

His student,
Weihua Tang

Dear Professor Kakudo

Yanhua Bai, MD, PhD
Department of Pathology, Peking University School of Oncology,
Beijing Cancer Hospital & Institute, China

I have been in the Department of Human Pathology, Wakayama Medical University, Japan for four years as a Ph.D. student under the instruction of Prof. Kakudo. Before I went to Japan, I heard that Prof. Kakudo was a strict and learned professor who had rich experience in instructing foreign students. When I entered his department and had close contact with him, I was really amazed by his personality of responsibility, generosity and kindness. For his students, he was a qualified and considerate teacher rather than a demanding boss. As an expert pathologist of thyroid tumor, he spent much time instructing us reviewing thousands of tumor slides and tried to pass his practical experience to us. It was well known for a researcher that the process of a research was usually not so smoothing, and it contained bitterness, disappointment and depression. What frustrated us mostly was that sometimes we could not find a reasonable explanation for the failure of our experiments. When knowing this, Prof. Kakudo usually encouraged us that failure was precious experience than success since we could consider and conclude more from failure. It was a unique experience for me to take part in the journal club conducted by Prof. Kakudo every Wednesday morning, which helped us to inform each other the newest development of our research field and learn show our findings. Prof. Kakudo was respectable and he influenced us with his own behavior. I still remember the scene that Prof. Kakudo told me that one picture in my powerpoint document for graduation oral defense was not so typical. At that time I did not take his words seriously. Several minutes later, he told me that he had found a typical picture for me. He did not explain more but taught me through his behavior that doing such a thing cost only several minutes but resulted as earnest and persuasion. Prof. Kakudo impressed us and influenced us through one and one seemingly ordinary things, and that comprised our beautiful memory in Wakayama Medical University and in Japan.

It has been a happy thing to be one of the students of Prof. Kakudo. Retirement means another new start in one's life. We hope Prof. Kakudo a splendid and enjoyable life in his new life.

退官おめでとうございます

中国山東大学乳腺外科 楊 其 峰

覚道先生におかれましては、ご定年退官を迎えられましたこと、心からおめでとうございます。私が日本に留学していた時、私の最初の指導教官桜井武雄教授からの紹介で、覚道先生と初めて会いました。外科医として、覚道先生の病理学教室で研究を始めることになりました。覚道先生から私に“ 標本を見ないと病理組織からの研究はできません。病理診断も参加してください”と言われました。私は覚道先生に“ 外科医ですから、病理診断は出来ません”と返事をする、覚道先生は厳しく私に言いました。“ しないと出来ない！”。それで、私は仕方なく形態病理診断を勉強し診断業務に参加しました。乳腺外科教授となった今、この時勉強した形態病理学の知識が、本当に役立っています。心から覚道先生に感謝を申し上げます。“ しないと出来ない” という言葉を、一生忘れられません。覚道先生、病理組織診断の機会を与えていただき、本当に有難うございました。

Dear Professor Kakudo,

Yaqiong Li, MD, PhD
Department of Human Pathology, Wakayama Medical University

It is honored but really hard for me to write down such a message to you, because no word can express my feeling and thanks to you. I got the most valuable gift in the world from you, and that is growth.

About five years ago, I got the chance to receive my Ph.D. training in your department. It was really excited for me to study abroad, but at that time I was merely a child mentally and I worried about everything everyday: my poor experiment technology, English, Japanese and communication ability, but I did not have any idea on how to overcome these difficulties and improve myself. The only word presented in my spirit is impossible: It is too hard and I can not finish that work by myself. However, you always told me that at first you may know nothing about the new field, never think it is impossible and just have a try, finally you will know everything. During the past five years, I have never forget your encouragement and found I have been much closer to become a real pathologist scientifically and an adult personally than before.

Different from other supervisors, you did not only push us to do bench work, but also gave us many chances to attend the academic conferences and take part in the social activities. I think that may be one of the important reasons why I enjoyed my life so much in Japan. One of the unforgettable wonderful memories for me is the 49th fall meeting of Japanese Society of Clinical Cytology in 2010, Kobe. I never felt so impressive by your well designed organization, creativity and the enthusiasm of all your Japanese staffs!

As everyone said, retirement means a new beginning of one's life. I wish you can start your new career smoothly and enjoy more personal time and space with your family. Finally, please accept my sincere congratulations on your retirement and best wishes for your health and happiness.

Dear Professor Kakudo:

Congratulation!

It is 'papillary thyroid carcinoma' that acts as 'bridge' between you and me!

I had a dream to become your student just at the time you did diagnosis on my own tumor tissue slide. I am so lucky to be your last PhD student!

Time runs so fast! No words can express my thanks to you, but there are really some words that I will never forget:

The first is '劉先生はいつでも明るいですね!', which will encourage me to be optimistic forever. In fact, you always behave in a ring-a-dingway every day, which impresses everyone surrounding you.

The second is 'Push, push and push!', which remind me to step up every day.

The third is 'You must jump out the textbook!', which teach me to stand high and see far. Your new idea on classification of thyroid tumor is one of the best examples for this word.

The fourth word is 'Show me your plan!', which make it a routine for me to make a plan for every year, month and day, and to fulfill it one by one.

The fifth is 'You should grow up!', which make me independent gradually to do diagnosis, research and autopsy.

The most impressive thing is your 'responsibility and comprehensiveness!'. You have a belief that you are responsible for training pathologists for both Japan and China. You do help our Chinese students to improve the research and teaching system in China!

You also contribute a lot for the communication between Wakayama Medical University and Shandong University. Most of your 13 Chinese PhD have already been specialist in different field in China. In memory of your contribution to China, you will be regarded as the generator of 'Thyroid club of China'.

Retirement is just the beginning of a completely new life! I wish you to enjoy your life everyday!

Congratulation again!

Best regards

Zhiyan Liu, MD, PhD
Department of Pathology and Pathophysiology
Shandong University School of Medicine



東海大学の皆様と



学生教育と学生の国際交流推進

平成16年度・平成17年度
学生自主カリキュラム報告



私達はこんな面白い事をしました！

和歌山県立医科大学医学部教務学生委員会
和歌山県立医科大学同窓会
(財)和歌山県医学振興会

2005年学生部長として企画

メキシコにおける

古代文化と風土病調査報告

— イツァ・ムーナを求めて 第一次医学踏査隊 —



苗からの夜間視察、第1日目

1971年学生として企画

和歌山県立医科大学探険部
(熱帯医学研究会)



山東大学との交流



山東大学客座教授授与



教育者、研究者、そして管理運営者として

和歌山県立医科大学 6年 和田 賢二

6年間の学校生活も終わりに近づき、1ヶ月後に医師国家試験を控えた今、自分の学生生活を振替ってみると、勉強以外の本当に多くの経験をする事ができました。この多くの経験が自分を人として大きく成長させてくれたと確信しております。その私のモラトリアムに最も力添えをして頂いたのが覚道教授であります。

「人とは違う学生生活を送りなさい。勉強ばかりしてはダメ。勉強以外にたくさんの経験をしなさい。」

これはよく覚道先生がわたくしに言われた言葉です。この言葉の元に覚道教授は私にタイやベラルーシへの留学、学会への参加など普通の学生生活では決して経験できない機会をたくさん与えてくださいました。この貴重な経験だけでなく数々の医師としての信念をご教授していただきました。多くの人生相談にも乗っていただきました。何度も何度も厚かましいながら、教授室を訪れました。私の今までの学生生活の中でここまで教育心にあふれ、私に影響を与えた教諭は他にはいません。

教授という立場の人間は人格者であることを確信したと共に、自分もいつかの目標としてこれからも人としてさらなる高みを目指して努力していきたいと思う。

覚道先生へ

医学部4年生 神野 友里

覚道先生、長い間お疲れ様でした。私は先生と知り合ってわずかな月日しか経っていませんが、先生にはいろんなことを教えていただきました。おかげで勉強ばかりで退屈だった学校生活がすごく充実したものになった気がします。去年、マイアミ大学に行って貴重な経験ができたのも先生のおかげだし、秋の学会では懇親会でサンバ隊の一員になれたのも先生のおかげです。『何か他の子がやらないようなことをやりなさい』という先生の言葉が、『やってみたくはいいけどちょっと不安だな』と思いどまっていた私をいつも後押ししてくれていた気がします。英語なんてほんと片言の私が、アメリカのmedical schoolに行くのはすごく勇気のいること、それから、サンバを踊ったこともない私がプロのサンバ隊と踊ることもやってみたくはいいけどすごく勇気のいることでした。先生にこのような機会を与えてもらい、まわりのクラスメイト以上に成長できたことをすごく感謝しています。退屈な人生にならないよう、覚道先生の言葉を日々思い出して残りの学生生活、社会人の生活を過ごしていきたいです。

短い間では本当にありましたがありがとうございました。

マイアミ大学に行ったときに知り合った世界各国の友達たちと。

こんな友達と出会えたのも私の人生の宝物です！！



和歌山県立医科大学学生 4回 北山 尚美

覚道先生には、私が三回生のときの基礎配属をはじめ、たくさんお世話になり、たくさんの経験をさせていただきました。2010年秋の第49回日本臨床細胞学会秋期大会ではお手伝いをさせていただき、はたしてこちらがお手伝いできたのか、お世話になったのかわかりませんが、外国からの先生についたり、懇親会のサンバに参加させていただいたりしました。私たち

は日ごろの感謝と、自分たちの趣味との両方で（笑）手作りの衣装をがんばってつくりました！会場にはプロのサンバ隊のひとたちがきて、とても盛りあげてくれました！最後には会場のみんで踊って、とても楽しい懇親会でした！！

覚道先生がよくおっしゃっていた「楽しく勉強」の意味が、いろんな経験をさせていただくうちにだんだんとわかってきて、おかげさまで、遊びは自分の成長につながる遊びがしたい、勉強は楽しくしたい、と思うようになり、なんだか素敵な将来がひらけたように思います！

退官されるということで内心とてもさみしく残念ですが、退官してからもぜひよろしくをお願いします。まだまだお世話になる気満々なことをかいてしまいましたが、がんばって素晴らしい将来をつかんで、恩返し...を、したいと思うので楽しみにしててください！！



覚道先生のご退官によせて

和歌山県立医科大学医学部医学科 4 回生 末 田 早 苗

私は 3 回生の冬に実施される基礎配属時に覚道先生の第二病理教室にお世話になりました。覚道先生には、学生たちの自主性を重んじつつも、しっかりと細かい点までサポートしていただき、私たちはのびのびと学ばせていただきました。基礎配属期間は 2 カ月間でしたが、あまりに居心地が良かったために、私はその後も引き続き第二病理教室へ出入りさせていただくようになりました。

覚道先生にお世話になった期間は 1 年半程と短いものでしたが、数えきれない程、様々なことで面倒を見ていただき、ご指導いただきました。その中でもとりわけ私の中で覚道先生のお人柄から学ばせてもらったことがありました。先生は、私たち学生を見かけると必ず「今日は何か楽しいことを見つけましたか？」と声をかけられました。この頃の私は、連日朝から夕方までギッチリつまった講義とテストに追われて楽しむ余裕をなかなか持てずにいました。「頑張ってますか？」と声をかけられることが多い中、「楽しんでますか？」という覚道先生の言葉は、私の学生生活の過ごし方を変えるきっかけとなりました。言葉だけでなく、先生ご自身も多忙な中、研究や診断を楽しそうにエンジョイされている姿を拝見して、人生を楽しむコツのようなものを教えていただいた気がします。

放課後に第二病理教室でコーヒーをいただきながら、顕微鏡を覗き色々な細胞組織を楽しむという贅沢な知的遊びの場を提供していただけたことを、本当に感謝しています。先生に与えていただいた貴重な楽しい時間は、今後私が医師として働くようになった際には、とても大切な思い出になると思います。

今後も、きっと何かとご相談に伺うこともあるかと思いますが、よろしくご指導をお願いいたします。覚道先生の春からの新しい生活でのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

職員対抗ソフトボール大会



学生と自宅でホームパーティー



学生の国際交流、第1回山東大学訪問団



甲状腺低分化癌トリノ会議





昭和48年卒業同級生と

細胞学会和歌山県支部の皆様と熊野古道を歩く





覚道教授就任 10 周年記念 平成 12 年 12 月 15 日



サイロイドクラブの皆様と

平成21年卒業生



平成22年卒業生



2008年紀三井寺で寒い花見



2009年教室旅行

平成23年卒業生



第2病理最終年度の『仲間たち』に感謝して

第49回 日本臨床細胞学会 秋期大会

The 49th Fall Meeting of Japanese Society of Clinical Cytology



編集後記

25歳で和歌山県立医科大学を卒業した時、私の退職がいつか来るとは思いもせずに、興味の赴くまま、自由奔放に研究活動、教育活動を過ごしてきました。私にとって未来が、時間が、永遠に続くような錯覚にとらわれて37年間を過ごしてきました。一つの区切りの日がこのように来るとは驚きです。大したことを成し遂げたとは思っていないのですが、人が職を得て、多くの方々と継続して取り組む時、この業績集のごとく、小さくとも何らかの結果が生み出されると実感し感無量であります。その間お世話になった皆様、仕事を一緒にさせていただいた皆様に、わがままを聞いてくれた教室員に、一緒に人生を歩いてくれた妻と子供に感謝いたします。

私が25歳で医学部を卒業した年、私の父覚道米三が、大阪市職員を55歳という若さで定年退職を迎えたことを覚えています。第2次世界大戦で7年間も兵士として中国大陸で戦った父は、帰国後廃墟の中で、肺結核との闘病、結婚、子供の誕生、家族を養うという苦労を重ねたのちに55歳で定年を迎えました。関西6大学で600と800メートルの記録を持っていたスポーツマンの父でしたが、結核治療の後遺症で、肺機能低下症に苦しみ、階段を上るのも立ち止まりながらの状態でした。衰えた55歳の父の姿を覚えている私が、その父の年齢を超え、健康で、余力を残した状態で、和歌山県立医科大学を辞することができたのは幸せと感じています。何年残っているか分からないこの後の人生ですが、この後も社会への役割を企画し、余力を持って新たな人生設計をし、後輩たちにとって一つのexampleになることができると考えています。

和歌山県立医科大学卒業生で、他大学での研修、研究活動を経て、和歌山県立医科大学の教授として迎えられた者は大変少なく、私がほとんど最初かと存じます。その後、近藤智善教授、赤坂教授、岡村教授などが帰ってこられました。できるだけ多くの卒業生が、(内向きでなく)学外、海外で多くの経験を積み、外聞を広め、人脈を作り、和歌山県立医科大学の賢明な未来設計に参画されることを願っています。母校、和歌山県立医科大学の発展を願うとともに、これから舵とりの困難が予想される地方医科大学の発展のために、異文化交流と変化が必須要素と考えているからです。

末筆ではありますが、皆様方の健康と、ご発展を祈念し、この第49回日本臨床細胞学会記念写真集と覚道健一退官記念業績集をお届けいたします。

2011年1月24日

覚道健一

第49回 日本臨床細胞学会秋期大会記念写真集
和歌山県立医科大学人体病理学教室 覚道健一
退官記念業績集

編集：和歌山県立医科大学人体病理学教室
発行：和歌山県立医科大学人体病理学教室
発行日：2011年2月吉日

印刷：(株)昇和印刷 〒640-8392和歌山市中之島1707